
けいおん! ~ 夢翔る物語 ~

黒翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！〜夢翔る物語〜

【Nコード】

N5677U

【作者名】

黒翼

【あらすじ】

今年から共学になった桜ヶ丘高等学校その廃部寸前の軽音楽部にある少年が出会った。そこから、物語の歯車が回りだす…という事で、出来るだけ早く更新しますのでよろしくお願いします！！

一話（前書き）

はじめまして黒翼と申します。

請謁ながらこれから小説を書かせていただきます。

どうぞよろしく願います。

今回はオリキャラのみしか登場しません（汗）

一話

くありきたりなプロローグ

カリカリ…

シャーペンを滑らせる音が響き渡る…

何故、今現在そういった状況かというと

ここが高校の入学試験会場だからであり
それと同時に俺の
第一希望の学校である桜ヶ丘高等学校の
入試中だからである。

キンコンカンコンコン

「それではペンを置いてください」

試験官の掛け声がかかり

周りからはペンを置く音が聞こえる
ちなみに俺はもうとくにペンを置き
解答用紙を裏返している。

「では、各自忘れ物の無いように退室して下さい」

その声と同時に俺の前の席にいた男子が声をかけて来た。

「……やっと……やっと終わった」

「……お前何で入試だけで死にそうな顔してんだよ」

コイツは俺の幼馴染の神谷幸治
親がパティシエの菓子屋の息子だ

「お前にとってはそうかもしれないけど俺にとっては『だけ』では
済まないレベルなんだよ……」

「お前がアホだからだろ」

「……うる…せエ」

コイツに出会ってから俺は親が優秀だからといって子も優秀になるとは限らないと知った。

そもそも、コイツの親が優秀かどうかは分からんが…

「まあンな事はどうでもいい。とにかく俺は帰る…」

「…ちょっと待ってくれよお」
「ヤダ」

「早いっつの…」

一話（後書き）

主人公の名前は次回から出そうと思います。

決して忘れたわけではありませんよ（笑）

二話

先ほどのやり取りの後、俺は幸治と別れ

自宅へと向かう途中

小腹が減ったので某ハンバーガーショップに寄り
腹ごしらえをしてから帰宅した。

自宅の『川霧』の表札が見え

玄関に付きドアを開ける…

「ただい…」

「おかえり!!」

「…」

「雄河!テストどうだった!?!受かりそう!?!?」

帰宅早々姉貴に肩を鷲掴みにされガクガクと揺らされた。
ちなみに雄河ってのは俺の名前だ…

こんな仕打ちを受けなきゃならねえんだ…」

「まあまあ、茜も悪気があったわけじゃないんだし」

お袋仕方無さそうに話しかけて来る。
茜ってのは姉貴の名前な。

「で、どうだったのテスト？」

続けてお袋が聞いてくる。

「まずまずってトコだな」

「受かりそうなの？」

「知らん…」

「早!？」

姉貴がすかさずツッコミを入れてくる。

「ま、どうでもいい…お袋、夕飯って何だ？」

「あんたの合格を祈ってカツよ」

それ昨日食べるべきじゃね？

というツッコミを入れようかと思ったが
面倒なのでやめておいた…

「じゃあ、俺はそれまで寝る。出来たら起こしてくれ…」

「はいはい」

そんなもって夕飯の時間まで
時間にして約四時間の間ずっと爆睡していたのだが
後に時間になったらしく母親に起こされ
食卓へと足を運んだ…

………

夕飯を食べた後
先程四時間も寝たにも関わらず
強烈な睡魔が襲ってきたが
抗う理由もなかったため
そのまま睡魔に身を委ねた

「…ン？」

とふと目が覚めた

時計に目をやると短針が二と三の間を指しており長針が六を指していた。

「…さつき寝すぎたか」

目が覚めてしまったので起き上がり

電気を点けた時

ふと部屋の片隅にあるギターに自然と目がいった

（そついやコイツも長い間触って無かったな…）

そんな事を考えながら

俺は久し振りにそのギターに触れた

「そついや、コイツが俺の所に来て今年で十年目か…」

思わず言葉が漏れる。

ポール・リード・スミス

ちなみにコイツというのはPRSというギターの事だ。

『買った』ではなく俺の所に『来た』という表現なのは
このギターは俺が勝ったのではなく親父の知り合いの
ミュージシャンから貰った物だからだ。

「久し振りに弾いてみつか…」

ベツトに腰かけたままアンプには繋がずに弾いてみた。

）
）
）

（なんだ、懐かしいな）

ふと、前の鏡を見ると

自分が映っておりその口角が上っていた
ハツとなり演奏をやめる

「はあ…」

何故、笑うのを止めたかというとなんと言っのだらうか…笑うと俺の顔は…怖いのだ
自分でもかなり気にしている…
なので極力笑わないようにしているのだ。
そのことを気にする原因になったエピソードもあるのだがそれはまたの機会にしよう。
まあ、別の理由もあるんだけどな……

「…寝よ」

ギターをいじって多少眠くなったので寝ることにした。

ベットに横になると

案の定睡魔に襲われ意識が飛びそうになった。
しかし飛ぶ寸前に今日が合格発表だという事が頭をよぎったのだがもう睡魔は目前に迫っている訳で脳が殆ど機能せずそのまま眠りへと落ちた…

三話

「ああーヤベエよー…」

「お前の今の状態こそヤベエと思うんだけど」

「うるせえ！俺はそんなに精神力強くねえんだよ！！」

「分かった分かった。だったら少しボリュームを下げる」

何故、今このような状況かというと

1・あの後、目が覚める

2・幸治から電話が入って一緒に合格発表を見に行こうと誘われる

3・断るが幸治が無理やり家の前へ

4・仕方なく一緒に行く

こんな具合だ…

そうこうしている内に

昨日、テストを受けるために訪れた学校
桜ヶ丘高等学校へと到着した

だが、校門の前に着いた所で足が止まった

「……」

「どうした？あ、もしかしてお前もぐぐってきた！？」

違う、と言いたかったのだがとりあえず今

目の前の状況の整理を優先しよう

：何故、男子率がこんなにも低い

いや、分かつてはいるんだが男子と女子の比率が

8対2くらいある。普通ならありえねエんだが

まあ、今年から共学化なんだからしょうがないと言えば
しょうがないのだろう。

よし、と心の中で状況整理がついたので
再び歩き出す

「ちょ、おい、待てって」

と、慌てて幸治も後に続いてきた

.....

「うわぁ……」

と幸治が漏らす

何故、そう言っ たかというと

合格発表の掲示板の前に受検者なのであろう

女子がごった返していた

周りには女子が去るのを待っているのだろう。

数人の男子が立ったまま話していた。

俺たちもそうしようかと思った所

合格者発表の掲示板の上の方に

俺の受験者番号があるのが見えた。

「あ」

自然と声が漏れた

「どうした？」

「俺、受かってたわ」

「マジで！？」

「マジで」

「いいな、俺の番号はまだ見えない…」

「じゃあ、先帰る」

「ちょっと待て！ー！待っててくれてもいいじゃん！？」

「冗談だ、そこの自販機の前の椅子に座ってる」

「分かった、見終わったらソツチ行くわ」

と言われたので俺は自販機でコーヒーを買って椅子に腰かける。

ピツと携帯で電話をかける
相手はもちろんお袋だ。

ガチャツと音がしたので通話を開始する

「あ、お袋か？俺受かったから」

『ホント！？良かったじゃない！？』

「ああ、サンキュー」

『ちょっと待って茜に代わるから』

「了解」

『もしもし雄河？受かったんでしょ？』

「ああ、おかげさまでな」

『良かったじゃん!』

「
おっ

『お母さんが今日は幸治君の家と夕飯食べに行こうって言うてるよ』

「まだ、幸治が合格と決まった訳じゃねえけどな」

『大丈夫!雄河が受かったなら絶対!』

「今の言葉、多少刺があった気がするんだが…」

『まあ、幸治君も受かってる事を祈ってなさいよ』

「了解、じゃあな」

と言って通話を切る。

すると、前の自販機で女の子二人がジュースを買っていた

「受かってて良かったね、お姉ちゃん」

「うん！ありがとう憂」

そんな話をしながらこちらに近づいてきた
すると、お姉ちゃんと言っていたので妹さんであろう娘が

「すみません、お隣いいですか？」

と聞いてきた

特に断る理由もないので

「どうぞ」

と承諾する

「ありがとうございます。」

と言いながら

妹の方がペコリと頭を下げた

「ねえねえ、君もこの高校受けたんだよね？」

「そうだけど、どうかした？」

「君も受かったの？」

「ああ、受かったよ」

「ホント！？じゃあ、私と同じだねえ」

「君も受かったんだ？」

「うん！」

「それじゃあ、同じクラスになれるといいね」

「そうだね。あ、そうだ名前なんて言うの？」

「俺？俺は川霧雄河だよ」

「へえ、私は平沢唯だよ」

「あ、私は妹の憂です」

「またもペコリと一礼。

なんかしつかりしてる妹だな。

なんて思っていると唯と名乗った方の女の子が
椅子に腰掛けながら唸っていた

「どうかした？」

と声をかけると

「雄河君だから、ユウくんでもいいか！」

「…はい？」

「呼び方だよ、雄河だからユウくん！」

「滅茶苦茶こっ恥ずかしいんだけど」

「大丈夫だよ、可愛いし！」

嬉しくねエッ！！

と言おうかと思っただ

なんか、傷つけそうだからやめておいた。

「そうだ、メアド交換しよう」

「別にいいぞ」

「あ、私も言いですか？」

「もちろん」

メアド交換なんて久し振りだな…

そんな事を思ってる内に交換が終わった

「ありがとう」

「あ、もうこんな時間！お姉ちゃんもう帰らないと」

「うん、分かった。じゃあ、また今度ねユウくん」

「それでは雄河さん、お先に失礼します」

「おう、じゃあな」

と、唯 & a m p ・ 憂の二人が帰って行ったのとはほぼ同時に…

「雄河！雄河！！雄河！！！！」

「ンだよつるせエな」

「俺も…俺も受かったぜ」

「そうか」

「軽ッ！！？？」

「お前なら受かると思ってたただけだ」

「そうか？ いや、照れるじゃねえかよ」

（どこに照れる要素があった？）

「…まあ、んな事より帰るか？」

「そつだな」

「そついや、家のお袋がお前んトコの家族と家の家族で
夕飯食べに行くとか言ってたぞ」

「おおゝそりゃ楽しみだゝ」

三話（後書き）

やっと唯& a m p ;憂登場!!

次回は入学式をメインにやろうと思っています。

律& a m p ;漣& a m p ;紬もちよこつとちらみせ使用かと思っています。

四話

「ああゝ、くそつたれが!!」

只今、俺は学校への通学路を朝飯も食べずに全力疾走中だ。
何故走ってるかって？

それは実に簡単、ベリーイージー、文字通り朝飯前
寝坊したからだ。

昨日の夜、幸治からのメールに付き合ってたせいで
睡眠時間が大幅に減少

そのため起床時間も大幅に遅れたって訳だ。

だいたい家から学校までは距離にして1キロ弱

だが流石に1キロを全力疾走し続けるには長距離走の選手でも無い
限り無理がある。

途中にあるコンビニで給水タイム。

ここまで来てしまえば学校までは歩いても五分くらいだろう。

「確か入学式が始まるのが8時だったな…」

携帯の時計を見ると7時50分を示していた。

（なんとか間に合ったな…）

なので、後はコンビニでコーヒーを買って
ゆつくりと学校に行くことにした。
すると、後ろからなんだか騒がしい声が聞こえてきた。

「雄河く！お前も寝坊したのか！？」

「9割方お前のせいだな」

「悪かったって」

（コイツ、ゼツテ悪いと思ってねェな」

・・・・・・・・・・・・・・・・

そうこうしてる内に学校に到着した。

クラス割を見たところ

何者かの陰謀により幸治と同じクラスになっており
ここ、数ヶ月の内で一番重いため息を吐いた。

クラスに入ったところ

俺と幸治以外は全員揃って着席しており

胸に入学式や卒業式で付けるような花がついていた
クラスを見まわした所

やはり女子の数が圧倒的に多い

というか女子の人数が男子の4倍くらいだった。

すると、窓際に座っていた人物から声をかけられた

「あ、ユウくん」

もちろんこのクラスで俺の名前を知ってるのはアイツ位だろう

当たり前ではあるのだが唯だった。

いやあゝ実に悪気のない笑顔で手を振っているのだが
ひとつ言いたい事がある…

クラス内でその名前で呼ぶな！！

どんな羞恥プレイだこれ！？

クラス内からは苦笑が漏れていた。

この場で俺がとるべき行動はただ一つ！！

唯を黙らせること

考えてから行動に写すまでの時間、約0・5秒

「ユウく…わっ！」

「平沢、頼むからその呼び方は止めてくれ」

「えゝいいじゃん」

「…分かった、二人きりの時はそれでいい
でも頼むからクラス内では止めてくれ」

「ぶゝケチゝ」

「な？頼むからさ！！」

「うーん、分かった」

この間の時間約10秒
やっと、コイツから離れられる
説得に成功したので自分の席を探す
すると、何の因縁なのか
俺の席は唯の隣だった。

「マジかよ……」

絶望したね

.....

入学式も終了し

今日はもう帰宅だそうだ。

（帰ったらまず寝よう明らかに睡眠時間が足りない）

などと思いながら席を立つと
唯に止められた

「ねえねえユウくん。今日この後ヒマ？」

「睡眠という仕事がある」

「この後、少しお茶でもしてこうと思うんだけど一緒に来ない」

「俺の発言完全無視か！？」

何だコイツの見事なスル　っぷりは！？

「ちょっと、合わせたい人がいるの」

「合わせたい人？」

「そう、合わせたい人」

「誰だよ？」

「それは後のお楽しみ」

「？」

まあ、別にいいかそんな時間かかんないだろうし

「分かった」

.....

「で、その合わせたい人ってのは？」

「ちょっと遅れるから先に行っててだつて」

「ふん」

「あ、忘れ物しちゃったからちょっと待ってて」

「了解」

すると、唯は教室の中へと消えていった。
それと同時にドンと俺の背中に強烈な衝撃が訪れた。

「うおっ!?!」

「っと」

倒れそうになって踏みとどまる

どうやら、後ろから誰かにぶつかられた様だ

振り向いてみると一人の女子が尻もちをついていた

「あ、すみません！」

「いや、別にいいけど…」

特徴的な娘だった

髪は茶色っぽく長さが唯と同じくらいで

前髪をカチューシャで上げていた。

「律、だから走るなって」

と言ってきたのは黒髪を腰のあたりまで伸ばした

前髪が姫カットの女の子だった。

「あ、漣」

俺にぶつかってきた女の子は律というらしく
黒髪の娘は漣というらしい一応覚えておくか…

「律、なんで転んでるんだ？」

「いや、ちょっとぶつかっちゃってさ」

「何してるんだよ全く」

黒髪の娘が恐る恐る俺に話しかけてきた。

「あ、あの…お怪我ありませんか？」

「あ、ああ別に大丈夫だけど」

「良かった、ほら律お前も謝れ」

「すみません!!」

「いや、大丈夫だよ」

「本当にすみませんでした
ほら律行くぞ」

そう言い残して二人の女の子は去って行った。

「何だっただんだ？」

一人でボソツとつぶやいたら後ろから声をかけられた

「あの〜」

「ん？俺ですか？」

「あ、はい」

と、振り向いたら金髪に近く眉毛が特徴的なおっとりとした感じの女の子だった。

「何か御用ですか？」

「これ、落としましたよ」

彼女が差し出してきたのは
生徒手帳だった

恐らくぶつかった時にでも落としたのだろう。

「あ、どうも」

名前を見ると確かに俺の生徒手帳だった

「いえ」

とにっこりと笑うとその娘は
人ごみの中へと消えていった。
すると

「お待たせ」

と言いながら唯が帰ってきた

「随分遅かったな」

「ちょっとね」

と唯が意味深な顔をする

「雄河！俺も一緒に行くことにしたぜ」

「スマン平沢、俺帰るわ」

「え？何で！？」

「雄河！？ちょっと待てっ！」

面倒なのが入ってきやがったな

「ハア」

とため息ひとつ、この時俺は
コイツ意地でも付いてくるなと俺は悟った。

五話

あの後、幸治の説得を試みたのだが
努力虚しく付いてくきやがった
なのでこれ以上疲れないためにも
幸治に対しては無視を執行中だ。

「ところで、平沢」

「ん？なあに？」

「お前、何でそんなに俺に構うんだ？」

「だって、クラスで知ってる子が少ないから」

「それだけで？」

「うーん、後はユウちゃんと話すのが楽しいから」

「ふーん」

そっけない返事に聞こえるかもしれないが
正直、少し嬉しかった。

そうこうしてる内に待ち合わせのハンバーガーショップに着き。
注文をして席に着くと間もなく一人の女子に声をかけられた。

「ごめんね、遅くなつて」

「?…誰?」

「あ、和ちゃん」

「和ちゃん？」

俺と幸治が理解できずに
首を傾げていると唯から説明が入った。

「あのね、この子が私が会わせたかった人」

「真鍋和です」

「ああ、俺は川霧雄河だ、んでコイツが神谷幸治」

「よろしくね」

「えっと雄雅と幸治って呼べばいいかしら？」

「別に構わねエよ」

「オツケー」

「じゃあ、俺は和ちゃんでもいい？」

と幸治が聞いた

「ええ」

「じゃあ、俺は一番無難な所で真鍋って事で」

「分かったわ」

自己紹介が終わった所で
その後は、各自自由に話を始めた
すると幸治と真鍋が話をしていたので
唯に話を振る事にした。

「なあ、平沢」

「なあに？」

「お前と真鍋っていつから一緒にいんだ？」

「えつとねえ、幼稚園のころからずっと一緒だよ」

「へえ、結構前から一緒にいるんだな」

「うん!ところでユウちゃんと幸治くんはいつから一緒にいるの?」

「俺たちは親同士が俺達が生まれる前から仲良かったらしいんだ」

「へえ」

「だから、生まれてからずっと一緒にいるよ」

「うわぁ、すごいね!」

「そうでもねえだろ」

「ううん、すごいよそんなにずっと一緒にいるなんて」

「?...そんなモンか?」

ふーむ、良く分らんな…

まあ、一般人から見ればそうなのかもな
すると、そこで幸治がスネークインしてきた。

「お？何だ何だ？俺達に内緒に何話してんだよ」

「べつつに、大した話じゃねエよ」

幸治を軽く受け流してから
四人で他愛もない話をした。

・
・
・
・
・
・
・

1時間程話してから
話のネタも無くなったので
店を出ることにした。

.....

店を出てから

少しすると唯が俺たちに話しかけてきた

「今日、すつごく楽しかったよね」

「まあ、結構楽しかったな」

「そうね、私も結構楽しかったわ、幸治は？」

「もちろん！楽しかったぜ！」

と、全員楽しかったらしく
それぞれ感想を漏らした。

だが、唯が少し曇った顔をしていたので
ちよつと、声をかけてみることにした

「どうした？平沢？」

「ユウくん」

「ん？」

「今日、本当に楽しかった？」

「は？」

「ユウくん本当に今日楽しかった？」

「ああ、楽しかったぞ」

「じゃあ、何で今日笑って無かったの？」

「ッ…いやそこは気にすんなよ、本当に今日は楽しかったから」

「うん、分かった」

今日楽しかった事は嘘じゃない
だが、それなのだが…

（笑う…か…）

そんな事を考えていると
十字路に差し掛かった所で
唯と真鍋が話しかけてきた

「それじゃあ、私たちはこっちだから、また明日ね」

「おう！また明日ね」

「……」

「ユウくん？」

「雄河？」

「あ？悪い、また明日な」

「うん、また明日ね」

「ええ、また明日」

と二人言い残し帰って行った。

「さて、俺達も帰るか？」

と、歩みを進めようと思った時
幸治に止められた。

「雄河」

「何だ？」

「さっき、何を考えてたんだ？」

「別に何にも…」

それ以上は言えなかった
幸治がいつになく真剣な顔をしていたから

「噓、言わずに話してくれよ」

「はあ」

自然とため息が出た。

「拒否権は？」

「今回ばかりは無い」

「はああ……」

さつきよりも大きなため息が出た。

「…さつき、平沢に『今日は楽しそうじゃなかった』『何で笑わなかったの?』って言われたんだ」

「…あ」

「そのことで少し考えてたんだ」

「そうゆう事が」

「……」

「雄河、もう『あの事』は忘れよう」

「無理言っな……」

「『あの事』は誰が悪いって事じゃねえよ、お前が抱える事はねえんだ」

「……」

「今は無理でも少しずつでもいいから、な？」

「……無理だ」

「あ、おい雄河」

「悪い、帰るわ」

「雄河！」

幸治の声を背中に受けながら俺は駆け出した。
昔の事を思い出しながら…

（あの『罪』は絶対に消えない、それは俺が一番良く分かってるだから俺は笑えない）

五話（後書き）

今回は雄雅の昔の『闇』を出してみました。

雄雅の過去はこれから少しずつ出していこうと思います

六話

「雄河！メシ食おうぜ」

「おお」

と、昼になったのでいつものように幸治と昼食の準備をする。

「でさ、いきなりんだけど」

とか言いながら幸治が話を振ってきた。

「あ？」

「お前部活とか入らねえの？」

「あゝ、まだ決めて無エ」

「そろそろ決めた方が良くないんじゃねえの？」

「それもそうかもしれないな…
何しろ学校が始まってから
二週間半はたつてる。」

「でもなア、入りたい部活も無エし…」

「中学校の時みたく、また軽音部入れば良いじゃねえか」

「…パスだ」

「まだ、引きずってんのか…」

「うるせエ」

コイツ人の忘れたい記憶を掘り返しやがって…

「まあ、本人がそれじゃあ仕方ねえか」

そんな話をしているとふと唯の声が聞こえてきた

『とりあえず、軽音楽部って所に入部してみました!!』

『へえ、でどんな事するの?』

（この声は眞鍋か…）

『さあ？』

（知らねエで入ったのかよ！？）

『えっ？』

『でも、軽い音楽って書くからきつと簡単な事しかやらないよ、口笛とか』

（なんだそのやる気の無エクラブ）

『何？そのやる気の無いクラブ？』

真鍋よそのシッコミは非常に正しい

.....

「よし、帰るか…」

昼食を食べた後

午後の授業によって体力を奪われた…
なので、とりあえず帰って早く寝たい…

「ねえ、雄河…」

「あ？」

誰かから声がかけられ振り向くと
真鍋が立っていた

「何か用か？」

「ちょっと、助けて欲しいんだけど…」

・・・

「という訳なの…」

真鍋からの説明が終わり
少しばかり考え込む、そして

「えっと、完結に言い直すと平沢が軽音部に入ってたがギターなんて
できないから断りに行きたい、だが一人で行くのは不安だから誰か
に付いてきてほしい、でも真鍋は用事があるから一緒に行けない、
だから俺に白羽の矢が立ったと…」

「そうなのよ」

「ユウくん、助けて」

頼み込んで来る真鍋と
俺の腰回りにくっついてくる唯…
うーむ…
…断るのは不可能だな

「分かった、一緒に行つてやる」

「ホントに!？」

「ああ」

「良かったわね唯」

「そんなら、ちゃっちやと終わらせるぞ」

「うん！」

俺が声をかけると唯は元気よく返事をし歩きだした

（アイツ、一人で行けるんじゃないか？）

そう思ったが声には出さないでおこう

そうゆう訳で俺は元気を取り戻した唯と軽音楽部の部室へ向かった。

七話

「なあ、平沢…」

「な、何…？」

「いい加減俺にひつつくのはやめてくれ」

「だってだって」

「そりゃ嫌なのは分かるけどよ…」

唯の入部を断るために軽音楽部の部室、すなわち音楽室へと向かって歩いているのだが…
あの後、元気になったはずの唯がまた腰へとくつついてきた。
嫌なのは分かるんだが、歩きにくい事この上ない…

「ほら、もうすぐだぞ」

「う、うん…」

最後の階段の前に来た時、
その階段の上から若い女性教師が下りてきた。

「あら？」

「あ？」

「平沢さんね。軽音楽部なら音楽室よ」

と、その女性教師は親切に教えてくれた後、俺達の横を通り過ぎて行った。

「よし、行くか…」

「う、うん」

ビビる平沢を連れて最後の階段を登り切り音楽室前まで来た…のだが

「耳が痛エ…」

「もしかして、あなたが平沢唯さん？」

「ハ、ハイ」

「入部希望の!!」

「ハ、ハイッ!」

（お前、断りに来たんじゃないっけ…）

「じゃあ…あなたは…？」

そこで、俺は初めてその声の主と顔を合わせた。

「…？」

その女子生徒が首をかしげていた。

「あ、お前ってこの前の…えーっと…確か『律』とか言ったな？」

「ええ！？何で知ってんの！？」

「お前この前俺に廊下でぶつかっただろ？」

「…っあ！…あの時の…！」

「そっだ」

「えっ！？じゃああなたも入部希望って事！？」

「いや、俺は…」

「やったー！！入部希望者二人目ゲットー！！」

「だから…」

「じゃあ、お二人さん中に入って入って」

「おい…」

（このアマ、人の話を全く聞かぬエな…）

つて、事で律とか言うのに半ば無理やりに
部室へと連れ込まれた…

．．．．．

「みんなー！入部希望者が来たぞー！！しかも二人も！！」

（いや、だから俺は違うってゆってますがな…）

「本当か!？」

「まあ」

とか言つて、二人の女子生徒が声をあげた。
つか、部員二人? しかいねエのか…?

「ようこそ、軽音部へ」

「歓迎致しますわ」

「よしムギ! お茶の準備だ!」

「はい」

俺達この状況下で入部を断れと…
厳しすぎる…

「さあ、遠慮せずに座って座って！」

「……ユウくん…」

と、唯が小声で話しかけてきた。

「とりあえず、今は従つとくのが良いんじゃないか」

俺も小声で返す。

「はい、どうぞ」

「……………」

「……………」

気まずいな

つか、何でこの三人はこんなに
近づいて来てんだ？

「おいし」

唯がそんな事を言ったので慌てて見てみると
普通に紅茶を啜っていた…

（待て待て待て、お前ホントに断りに来たんだろうな）

「おいひ〜」

ケーキを口に入れて満足そうに微笑む唯。
そりゃ、上手いんだろうさ。

見るからに高級そうなケーキだからな…

…つか、このケーキとかティーカップはどこから
支給されてんだ？

「平沢さんはどんな音楽やりたいの？」

いつの間にかしゃがみ込んだ律が唯に向って聞いていた。

「え？」

「どんなバンドが好きか？」

「ええ？」

「好きなギタリストは？」

「えっと…」

「う…」

唯よ頼むからそんな目で俺を見ないでくれ

悪いが俺には何にも出来ん。

頑張れとアイコンタクトを送ってやるくらいしか…
すると、唯はそれを受け取ったらしく軽く頷いた。

「じ、じ、じっ」

「ジミ・ヘンドリックス？」

おいコラ黒髪何で邪魔すんだ…

ってこの子も確か律と一緒にいた子だよな？

確か濡とか言っただな…

まあ、今はんな事はどうでも良い。

「おおー！」

（このカチューシャ、ホントに止めてやってってくれって）

「いええ、じ、じ」

「ジミー・ページ？」

「おお〜！」

（…駄目だなこりゃ）

「ちがつ、じ、じ」

ほら見る、唯がアホな子になってるじゃねエか…

「ジェフ・ベック！？」

お前もいい加減唯にしゃべらせてやれよ…
人の話は聞くモンだぞ。

「そっかぁ！ジェフ・ベックかぁ！！」

「どなた？」

「ロックギタリストにも二種類しかない
『ジェフ・ベックとジェフ・ベック意外だ』って言われている
常に新しいサウンドを追求する挑戦的なギタリスト！」

「まあ」

「さっすが渋いね平沢さん！」

「あはっ…はははは…」

「じゃあ、君は…」

「俺か？俺は川霧雄河だ」

「じゃあ、川霧くんはどんな音楽がやりたいの？」

（やっぱり、俺から言うしかないか…）

「盛り上がってるトコ悪いんだけど俺、入部希望者じゃねエからな」

「」「へ」「」

三人が固まった

恐らく30秒くらい固まっていただろう。
硬直が解けるとすぐに

「「ええええ！？」」

「うるせエ……」

「だってだってさっき入部希望って」

「んな事言っただけぞ……」

「……あ」

しばし考えて思い出したらしい
その声を聞いて溲って子が律に聞いた。

「律、本当なのか？」

「ハイ、イッティマセンデシタ」

「りいっ〜!!」

「すみませんッ!!」

「あの〜ごめんなさい、無理やり引き込んでしまつて」

ムギと呼ばれていた子が話しかけてきた。

「いや、一応俺ものぞきに来るつもりだったから…コイツの付き添いで…」

「って、君確かこの前俺の生徒手帳拾ってくれたよね？」

「?…ああ、あの時の!」

「あの時はサンキューな」

「いえいえ」

そんな話をしていると

こっぴどく叱られたらしい律が今度は唯に話しかけた

「でも、平沢さんが入部してくれてよかったな」

「一週間以内にあと一人集まらなかったら廃部になる所だったんです」

…？

今なんつった？廃部？

ってことは俺等は断りに来たんだから…

「ホントにありがとう」

（滅茶苦茶言い辛いな）

唯の奴ホントに言えるのか？
そんな疑問が頭をよぎった時
唯が勢いよく立ち上がった。

「あ、あのっ！」

「「「ん？」「」」

と、三人が首をかしげる。

「あのっ、申し訳無いんですけど
実は入部するの止めさせて下さいって言いに来たんです！」

「へ？」

律が拍子抜けな声をあげた。
だが、唯が続ける。

「ギターは弾けないし、もっと違う楽器をやるんだと思ってて…」

「じゃあ、何なら出来るの？」

そう聞いたのはムギと呼ばれていた子、この前生徒手帳を拾ってくれた子だ。

「カスタ…は、ハーモニカ！」

カスタ？

あ、カスタネットか…

絶対コイツ見栄張ったな…

「あ、ハーモニカならあるよ。吹いてみて！」
「ごめんなさい、吹けません!!」

だから、見栄張るなつてのに
つか、何でコイツはハーモニカなんて持ってたんだ？

「でも、うちの部に入ろうとしたって事は
音楽には興味あるってことよね？」

「他に入りたい部とかあるの？」

と漣 & amp・ムギが聞いた。

「う、ううん、特には…」

すると、三人がアイコンタクトをし始めた。

（何を企んでんだ？コイツ等）

「本当にごめんなさい…じゃあ行こうユウくん」

「あ、ああ」

「ああ、ちょっと待って！」

「もう一杯お茶いかが？」

「でも…」

「クッキーとマドレーヌもあるの…！」

「うんうんっ」

今度はムギ& a m p・律コンビで食い下がってきた。
つか、餌付けたな…

・・・

「おいし〜」

結局、唯が誘惑に負け残るハメに…

「はっ、すみません。こんなに御馳走になるつもりじゃ…」

唯が謝る

「いいいの」

「川霧くんもどうぞ」

と、ケーキが差し出されるが俺は食べる訳にはいかんだろ…
そもそも、入部希望でも無いし…

「いや、悪いから遠慮しとくよ」

「そんな事言わずに食べてみなって」

と、律が促す

これは、食べなきゃいけない雰囲気だな。
仕方なく、ケーキを口に運ぶ。

「うま…」

「だろー！」

いや、「冗談抜きでマジで美味しい

恐らく幸治の作る菓子とかより美味い
あいつも一応親父さんがパティシエなだけあって
洋菓子を作るのはかなり上手い方ではある。
だが、このケーキはそれ以上に美味かった。

「毎日こうやって一緒にお菓子を食べましょう」

（それは部として駄目じゃねエか？）

と突っ込もうかと思ったが場の空気を壊しそうなので止めておいた。

「何か趣旨が違ってきて…」

ガンッ！

「~~~~~ッ」

「!？」

なんか、スゲエ音が聞こえた。
ンでもって、なんか漣が悶えている

(今一体何が起きた?)

そんな事を考えていると律が再び唯に話しかけた。

「平沢さん、他にはどんなものが好き？」

「んー、美味しいものなら何でも」

一瞬、律が固まった気がした。

「家では休みの日とか何して過ごしてんの？」

「ゴロゴロ…かな」

「好きな物とかある？」

と、今度はムギが聞いた。

「可愛いものが好きかな」

「苦手なもの?」

「暑いのも寒いのも苦手なんだ〜冬はコタツに籠りつきりだし〜夏は床の上を転がってばかりいるの〜」

（スゲエ生活だな、まあ俺も暑いのも寒いのも嫌いだけど）

今の発言で三人全員が黙った。

そりゃ、そうだろうな

これ言われたら他に何も言えないだろうよ。

「あ、あのっ…じゃあ」

話の区切りがついたので席を立つ唯
それにつられて俺も立ち上がる。

だが…

「ああ!!!行かないで!お願い!!!」

ゴロゴロしてるだけで良いから！」

「もっと美味しいお菓子持ってきますから！」

（ケーキとか持ってきてたのお前か）

と、今はどうでも良いような事に納得した俺。

「…ごめんなさい、軽い気持ちで入部するなんて書いたから期待させるだけさせて…なんて謝ったらいいかあ〜〜」

「うつ」

（マジかよ！？泣き出しちゃったぞ！？）

これって、俺がどうにかしなきゃいけないのか！？
しばし考え、俺が取るべき行動が決まった。

ポンッ

こっ恥ずかしかったが平沢の頭に手を乗せてなでてやった。
それぐらいしか、俺の頭は回らなかったからだ…

「うつ、グスッ」

と少し泣きやみ始めたので
他の三人にアイコンタクトを送る

（お前ら何とかしてくれ！これは絵的にヤバイ！！俺が泣かしたみたいに見える！！）

と言っ意味を込めてのアイコンタクトだった。

すると、運良く律が察してくれたらしく
口を開いた。

「じゃあ、せめて私たちの演奏だけでも聞いて行つて」
「えっ？」

（お、ナイスだ律！反応したぞ）

「演奏してくれるの！！」

「……」

（あ、あれっ？、もう泣き止んだ？）

ま、まあ良いか…

………

俺と唯は長椅子に腰掛けて三人の演奏を待った。
すると、アイコンタクトを取った三人の演奏が始まる。

「ワン・ツー・スリー・フォー！」

）
）
）

律たちが演奏したのは
恐らく誰でも聞いた事くらいはあるであろう
『翼をください』だった

）
）
）
）

（中々いい感じだな）

素直にそう思った。

三人しかいないのだが

でも、各々が良い音を奏でている。

）
）
）
）

そして、一瞬のように感じた時間は終わりを告げる。
終わるとすぐに唯が立ち上がった。

「わあ」

そう言いながらパチパチと拍手をする

「えっへへ、どうだった？」

と律が聞く。

俺は良かったと思うんだが
唯はどう思ってたのかねえ？

「なんて言うかすごく言葉にしにくいんだけど…」

恐らく喜んでいるんだろう

顔には満面の笑顔を浮かべ言葉を続ける。

「あんまり上手くないですねっ!!」

……..
「バツサリだー」

恐らく三人もそう思っただろう。

「でも、なんだかすっごく楽しそうでした!」

「「「ん?」「」」

「私!この部に入部します!!」

(ええ!?!マジで!?)

断りに来たはずなのに引きこまれてしまった…

…まあ、それも悪くねエだろうな。

すると、信じられないのだろうか

律&澪がお互いの頬を引つ張り合っていた。

そして、夢でないと確信したのだろう

「バンザイ!!」

と澪に頬を引つ張られたまま声を上げる律。

そりゃ、嬉しいはずだ…

廃部がなくなるんだからな。

それじゃあ、これで俺のお役は御免だな…

だが静かに立ち去ろうとした俺に律から声かけられた。

「なあ、雄河!」

「あ?」

「雄河も入らないか？軽音部！」

「何で？」

「きっと楽しいよ！ユウくんも入ろうよ！」

と唯も声をかけてくる。

「俺が入っても大した変化はねエと思うぞ」

「それでもだよ！」

「それに人数が増えれば演奏の幅が広がる！！！」

と律&唯に促される。

（でも、俺が入ったら『あの時』みたいになるんじゃないだろうか
…？）

「いや、俺は…」

「良いじゃん！！絶対の絶対に楽しいから！！」

（何でだろう俺は昔それで罪を犯した…それでも、今度は今回だけは
大丈夫な気がする）
そこまで思ったら返す言葉なんて決まっていた。

「分かった…俺も入る」

「ホントに!？」

「マジで!？」

と律&唯が声を上げる。

「ああ、マジだ」

「「「いやったー!?!?!?!」」」

唯&律が豪快にハイタッチをする。

（早くも意気投合だな…）

でも、この部に入ったら入ったで騒がしそうだな…

…まあ、そんな日常も悪くねエか

「フフーン　ちょっと失礼」

と、律が長椅子に置いてあったバックからカメラを取り出した。

「じゃあ！軽音部活動開始記念に！」

「ああ。私のカメラ…」

（遷のかよ）

と心の中でツッコミを入れた。

「いづくよん！」

とか言いながら律がカメラを構えた。

するとすぐにパシャッとシャッターを切る音がした。

多分、俺あんまり映ってねえなとか思いながら撮った写真を見ると案の定

顔が若干見切れていた…

（だがまあ、デコしか映っていない律よりはマシか）
と、思った。

「あ、でも私全然楽器できないし…あ、マネジャーとかどうかな？」

（いやいや、運動部じゃねえんだからマネジャーはねえだろ…）

「いや…運動部じゃないんだし…」

律が俺と寸分変わらぬツツコミを入れた…

「そうだ、この機会にギターを始めてみたらどうかしら？」

「お、良いんじゃない？エのやってみるよ」

俺も賛同する。

「えっ？でもすごく難しそうな……」

「大丈夫だよ！私たちも分かる所は教えてあげるし！」

と律も促す。

「……………」

しばし考え込んだ唯が出した答えは

「うん、そうだね。さっきの演奏聞いてたら私にもできるかもって
思えてきた!!」

「ソ、ソレハヨカッタ…」

唯、ちよつと言つ言葉を考えてやれ
この時俺は心からそう思った

「雄河もどうだ? ギターやってみるか?」

と律が聞いて来た
そっぴや、コイツ等には言つて無かつたな…

「ああ、俺ギター弾けるからな」

と言っていると

「マジで!?!」

「まあ」

「おお!」

「ええ!?!」

と各自違う反応をした。
まあ、そんなモンかもな…

「だから、平沢がギターをやるってんならある程度教えられるぞ」

「おおゝスゲゝ強力なメンバー加入!!」

「そんなに、期待するなよ？」

と、調子に乗った律を抑え
若干不安ではあるが
俺の新しい軽音部での高校生活が始まった。

七話（後書き）

やっと軽音部始動です!!

ここまでだけで凄く長く感じた黒翼でした…

と、まあそんな事は置いておいて

次回は、唯とギー太との出会いを書こうと思います！

では、皆さんまた次回お会いしましょう!!

八話（前書き）

今回から少しずつ雄河の過去を明かしていこうと思います。

しかし、非ッ常に私事ではあるのですが

通っている高校のテスト期間中なので今回は

だいぶ短めです（汗）

本当に申し訳ございませんッ！！

八話

軽音部に入部してから早くも一週間がたった。

だが、俺の生活には大した変化がなかった。

それもそうだろう、部活に行っても基本的にはムギの持ってくるケ
ーキなんかを

食べて、話しているだけなのだから…

しかし、本日俺は帰宅している事はしているのだが

四人の女子（軽音部メンバー）を引き連れている。

何故かというとな長くなるのだが

唯の「ギターを触ってみたい」の発言によって全てが始まった。

その発言に対し律が俺の持っているギターを触らせてやれと言い始め
断った事は断ったのだがエンジンのかかった律とそれに便乗した唯
を止める事は出来ず

今に至るって訳だ…

「とりあえず上がってくれ…」

「……お邪魔します」「……」

(とりあえずリビングにあげるか…)

そう思いリビングのドアを開けると…

「あ、雄河、お帰り」

とか言いながら姉貴が声をかけてきた
と言つか唯達に会わせたくない人物がいた…

そのため俺が取るべき行動は一つ…

ボタン…

リビングからの退却…

「とりあえず俺の部屋にあがってくれ…」

バンッ！

姉貴が思いっきりドアを開けて出てきた。

「ちょっと、雄河なんでスルーするの！？って、あらっ？お友達？」

「部活のな…」

「「「お邪魔します」「」」

と四人が口をそろえて挨拶した。

「はい」

姉貴が反応する。

「とりあえず俺の部屋にあがってくれ」

立ち話をするのも何なので俺の部屋に入れることにした。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「よし一つ聞くぞ？何でアンタまで入って来てんだ？」

「いいじゃない、雄河の友達がどんな子達かみたいの」

「…面倒臭エ」

「そこっ！あからさまに嫌な顔しない！」

「茶でも淹れて来るからちょっと待っててくれ……」

「無視しないっ！」

「……………」

バタンッ

……………

茜
s
i
d
e

雄河がお茶を淹れに台所へ戻って行ったので
雄河の友達たちに一つ聞きたい事を聞いてみた。

「ねえ、あなた達」

「「「はい？」」」

四人が同時に反応した。
息ピッタリね。

「ごめんね、ひとつ聞きたい事があるんだけど…」

最初は聞こうか悩んだ…

でも、こうでもしないと雄河が前へ進めない気がした。

「「「「なんですか？」「」「」

「雄河、あなた達の前で笑ったり…した？」

雄河には悪い気がした…
でも、仕方がない。

「いえ」

「うっん」

「笑ってないです」

「確か笑って無かったな」

やっぱりだ、恐らくそうだろうとは思っていた。
しかし実際に聞いてみると少し辛い…

「やっぱりね…」

「やっぱりって？」

カチューシャが特徴的な女の子が聞いてきた。
やっぱり、話した方がいいよね。

「それは多分…まだ雄河があなた達に心を開いていないんだと思うんだ」

辛かった…

でも…止めるわけにはいかなかった。

彼女たちには知ってもらわなくちゃ…

これから雄河と付き合い合っていくなら
過去を雄河を…

「どういうことですか？」

と、カチューシャの女の子が聞いてくる

「まあ、私は特には気にしてなかったんだけどね」

「実は昔の雄河はね、世間で言う不良だったのよ…」

「えっ」

女の子の誰かが声を上げた
しかし私は続ける。

「それでも、昔の雄河は良く笑っていた…これ以上無いってくらいの眩しい笑顔だった」

「じゃあ、何で？」

黒髪の女の子が聞く。

「本当はね雄河は自分が不良である事が嫌だったらしいの」

「だから、中学2年の時そんな自分を変えようと軽音楽部に入ったのよ……」

「「「「「……」」」」」

「でも、一年もしないで雄河は部活を辞めてしまった……」

「その時の理由は、今になっても誰にも話そうとしないの私たち家族にさえね…」

「」「」「」
「」「」「」

「でも、分かるのはその頃から雄河は笑わなくなってしまった…」

「しかも、それからというもの、雄河はほとんど友達付き合い合つ事を止めてしまった」

「そうだったんですか…」

カチューシャの女の子がつばやいた。

（あ、ちょっと雰囲気暗くしちゃったかな？）

「でもね、高校に入ってまた軽音部に入ってたって聞いて私はびっくりしたわ」

「…あ」

「それで私は思ったの…きっとあなた達なら」

「雄河の抱える『闇』を何とか出来るんじゃないかって」

「だから、雄雅と付き合っ^ていてもし^も雄河が少しでも笑^ったなら」

「それは、あなた達に心を開いた証拠だと思^っつ…」

「だから、その時は雄河の力にな^ってあ^げて」

「そして、昔の事も聞^いてあ^げて欲^しいの…」

四人はしばしうつむいた後、
顔を合わせて笑顔^を浮かべながらこ^う言^った

「「「「はい！」「」」

「うん、ありがとう…雄河の事よろしくね」

「「「「はい！」「」」」

（きっと、この子たちなら雄河の抱える物をどうにか出来る）
彼女たちの笑顔をみて私は、その時そう確信した。

するとトントントントと階段を上がってくる足音が聞こえた。

「これで、私の話はおしまい…聞いてくれてありがとうね」

そう言い残し私は雄河の部屋を後にした…

八話（後書き）

今回は少々シリウス回にしてみました。

雄河の過去、そして闇、それを表現出来るかが心配です（汗）

次回はすぐに更新できると思います。

それでは、次回またお会いしましょう！！

九話（前書き）

前回の投稿から時間がかかってしまつて申し訳ありません（汗）

今日やっとテストから開放された黒翼だつたりします…

なので、今日からまた投稿に励みたいと思います。

それでは、前置きが長いのもあれなので

さっそく、どうぞっ！

九話

「ん…」

朝になったらしく目が覚めた…のだが

「はぁ…ダリイ…」

憂鬱である、実に憂鬱である

何故かって…？

簡単に言えば睡眠不足だから。

昨日、唯たちが来た後の夜（深夜一時位だったと思うが）

何故かMAXテンションの幸治から電話がかかってきて

一晩中、アイツの自慢話に付き合わされるといふ悲劇が起きた。
時間にして約三時間…

誰でもこうなるに決まってる

「あ、学校…」

時計を見るともう九時を回っていた…

今から、ダッシュで行っても

九時十分位だろう…

故に走るなんて無駄なこととはせずにのんびりと…

ピピピピッピピピッ

電子音が鳴り響いた

一応言っておくが目覚ましとかではない…

では、何かというと…

「もしもし？」

携帯だった…

『あ、もしもし？ユウくん？』

「…誰？」

今だから言えるのだが
俺のことをユウくんなんて呼びやがるのは
たった一人しかいなかった…

『もう、私だよ』

「あ、平沢か…」

電話の相手は唯だった…

「何か用か？」

『もう、何で学校来ないの？』

あ、そういう事が
オーケー、納得いった。

つまり学校が始まってんの
に俺が来て無いから
電話をかけてきたと…

「悪いな、それで今そっちに幸治いるか？」

『うん、いるけど…幸治くんがどうかしたの？』

「…いや、何でもねエ…」

どんだけ、タフなんだあいつは…

『ところで、何で今日来てないの？』

と、唯が再び疑問をぶつけてきた…

「とある輩のおかげで寝過ごしたんだよ…」

『？』

「気にすんな…こつちの話だ…」

「じゃあ、今から行くわ」

『ホント！？』

「嘘言って何の意味がある？」

『わかった！じゃあ待ってるねえ』

そついい終えると電話が切れた。

（さアて、じゃあ行きますか）

そう思いベットから立ち上がった。
とりあえず、着替えて
洗面台へと行き髪型を整えリビングへ…

「…誰もいねエし」

誰もいなかった…
いつもは母親もいるはずなのだが

「あ？手紙か？」

テーブルの上に手紙があった
そこにはこう書かれていた

『雄河へ

少し友達の家遊びに行つて来るので
遅刻せずにちゃんと学校行きなさいよ』

「スマンお袋、すでに一つ守れてない…」

もう、遅刻している…
ということに残りを達成すべく
朝食をものの五分でたいたらげ
学校に向かうべく玄関のドアを開けた…

九話（後書き）

後書き 短くてすみません（汗）

次回は長くしようと思います！！

十話（前書き）

お久しぶりです（汗）

ちょっと前まで学校の行事にでていた黒翼です。

十話

ガラッ

「……………」

（何で誰もいねエンだ？…）

学校に着いたので教室のドアを開けたのだが
…誰もいなかった
今の時間帯は
どこも授業中のはずだ
ふとそう思い

授業連絡の黒板に目をやるところ書いてあった

『家庭科調理実習

持ち物

マスク・エプロン・三角巾 備考

調理実習十分前には

調理室に集合するように』

だそうだ…

今は家庭科の授業中の様だ

（面倒臭エしサボるか…）

そんな事を考えていると…

ガラッ

と、教室のドアが
開け放たれた

「あ？」

サバろうという夢が打ち砕かれたため
若干イライラしつつ
入口の方に目を向けると…

「は？」

…誰もいなかった
確かにドアは開いてはいるのだがそこには誰もいなかった

「何だ？イタズラか？」

一瞬そんな事を思ったが
すぐにそうではないと知る

「ユウくん!!」

「おおぅ…」

耳元で誰かが叫んだため
聴覚が一時的に使用不可にっか、
どんだけすばしっこいんだよ…
ネズミかっつーの

「ユウくん!いつ来たの!?何で遅かったの!?!」

「スマンな平沢
今の俺にはお前の
マシンガントークに
ついていくのは不可能だ」

声の主は他でもない
唯であつた

「いつ来たの!?ねえ!!!いつ来たの!?!」

話し聞けよ…

「ついさっき
来たばっかだ」

「そうなんだ〜！
じゃあ今から家庭科の
調理実習があるから
一緒にいこう？」

全く、サボろうと思ってたのに…

（…それも悪く無エか）

「了解…じゃあさっさと
行くぞ」

「うん」

（つーか、何でコイツは教室に来たんだ？
まさか、サボろうと思ったとかじゃねえだろうし…）

「そっいやお前は
何で教室に来たんだ？」

「あ、そうそう私
エプロン忘れたんだった」

(コイツらしい理由だったな…)

「なら、早く取ってこいよ
待ってやるから」

「うん」

トットットッ

と駆け足で自分の席に戻り

エプロンを抱えた唯が戻ってきた。

「お待たせ」

「ンじゃ、行くか？」

「うん！」

唯の元気な返事と共に
俺達は教室を後にした。

十話（後書き）

今回も短くなってしまい申し訳ありません（汗）

次回は長くしようと思います！！

十一話（前書き）

本日二回目の更新です!!

まあ、前置きもだらだらやってるとアレなんで

さっそくどつぞー！

十一話

「ダリイ……」

帰宅途中でもあるのに
ものすごくしんどい…

あの後、

家庭科室に行き
後に先生にこっぴどく怒られた…

「諸悪の根源って幸治じゃねエか…」

そんなことをずっと考えながら
現在、帰宅中である。

「近道して帰るか…」

家に帰るには大通りを通ればつくのだが
路地裏の道を通ると若干速くつくのだ。
そう思い、路地裏に入ったところで
誰かの声が聞こえてきた。

「……下さいッ！」

「あ？」

（なんか女の子の声が聞こえんな…）

そんなことを考えて歩いていると
女の子の声が次第に大きくなり
何を言っているのか聞こえてきた。

「やめて下さいッ!!」

どうやら数人の女の子の様だった
で、それがよくマンガに出てきそうな
不良グループに絡まれていた。

「いいじゃん、ちょっと遊ぶだけなんだからさ」

(まったく、この手のバカは何でこうつじやうつじやと)

見たところ男の人数は七人くらい
そんで、女の子の人数が三人…
故に彼女たちが逃げ出すには
陸上部でも無い限り不可…

「何でこんなトコ通っちゃまったんだ…」

だが、ここまで来て見て見ぬふりはできない…
ここで選択肢が二つ

1、無視する

2、不良共を排除

……… 2だな

「なア、邪魔で通れねエンだけど」

その言葉と同時に
男の一人の顔に拳を叩きこむ。

「えっ？」

女の子の一人が真の抜けたような声をあげた。

「て、テメエ!!」

別の男が声を荒げた。

「だアからア、邪魔なんだって」

「このヤロオ!!」

とか言いながら突っ込んできた…

「めんどくせエなア」

? s i d e

男の人に絡まれて困っていたら突然別の男の人の声が聞こえてきた。

「なア、邪魔で通れねンだけど…」

その方向をみると、色が抜けたような独特な白い髪の毛の人が立っていた。

その瞬間、目の前にいた男の人が吹き飛ばされた。

「え?」

つい、真の抜けた声をあげてしまった。
何が起こったのかが理解できない。

「このヤロオ!!」

ボーっとしていると
別の男の人が走りだした

「めんどくせエなア」

白髪の人がボソツとつぶやいた
その瞬間走って行ったはずの男の人が
叫び声をあげた。

「いつでえええええ!!!!」

そう、叫びながら自分の腕を

押さえて倒れ込んでしまった。

（一体何が起こったの？）

「おい、テメエ等」

と、その白髪の人はまだ私たちを囲んでいる
男の人たちに向かって言った
聞いた人を一瞬で震え上がらせるような
トーンでそつと

「コイツみてエになりたくなかったら
2秒以内に俺の視界から消え失せろ……」

直接言われてなくても怖かった。

「おい！！逃げんぞ！！」

そう叫んで残りの男の人たちは
逃げて行ってしまった。
すると白髪の人がボソツと呟いた。

「はア……くっだらねエ」

と言うと、私たちの横を通りすぎて
行ってしまった。

「あ、ちょっと！」

「梓！？」

「どこ行くの！？」

「ごめん！先帰って！」

友達には悪かったけど
そう言い残して白髪の人を追いかけた。

雄河 s i d e

「くっだらねエ……」

面倒な奴らを追っ払ったが
もっと、面倒なことになりそうだった

「あのっ！」

先ほど助けた女の子の一人が
追いかけてきていた。

「あ？」

「あの、その…」

なんか、言いたそうにしていた
多分お礼を言いたいんだろう

「別に礼なんて言わなくても大丈夫だぞ」

とりあえず、助け船を出してやった

「えっ、でも…」

「俺はただ道を塞いでた邪魔物を排除しただけだからな
礼を言われるような事はしてねエよ」

実は助けたなんて言える訳ねエしな…

「いえ、でも助けてもらったことには変わりありません！」

「なら、その気持ちだけで十分だ」

しかしあんまり効果がなかったようだ…

「この後時間ありますか？」

「おい、俺の発言に対する応答は無しか？」

「とにかく、時間ありますか？」

なかなか頑固だなこの子…

「まア、あるけど…」

「じゃあ、行きましよう！！」

そういうと彼女は俺の腕を掴んで引っ張ってきた。

「って、おい引つ張んな！そして俺をどこに連れていく気だ！？」

「夕食でも一緒にと」

「結構だ！！」

「良いですから来てください！」

梓 side

やっと、白髪の人を説得して
ファミリーストランへとやってきた

「で、俺をとっ捕まえて何をする気だ？」

「ちょっと、聞こえが悪いんですけど…」

「とりあえず、俺を捕まえた理由は？」

「お礼をしようかと思って…」

「で、ファミレスに入った理由は？」

なんかさっきからずっと不機嫌そうだな…
気分悪くしちゃったかな…？

「…もしかして、怒ってますか？」

「あ？」

「だって、無理やり連れて来ちゃったし……」

「……いや、別に」

（良かった……）

「あ、そうだお名前なんて言っんですか？」

「俺の名前？川霧雄河だけど」

「私は中野梓です」

「ふーん」

(う、話が續かない…あつ、そうだ！)

「な、なんて呼べばいいですか!？」

「まあ、無難なトコで雄河で…」

「……………」

「？」

ああ、まずいよ…
私から誘ってるのに…

「……」

「なあ？」

「は、ハイツ！？」

私が口ごもってたから

雄河さんが話し始めてくれた。

「オマエさ、何でそんなに堅くなってるの？」

「えっ、いやその…」

「ここまで連れてきた時みたくフツーに話しゃ良いじゃん」

…そうだよね

助けてもらったお礼を言うためだけで来てもらったわけじゃないし普通に話しても良いんだよね。

「あ、ハイ！！そうさせて貰いますー！」

「ああ、そうしろ。」

「じゃあ、ひとつ聞きたいんですけど。」

「こっちから話を振るのがマナーだよね。」

「なんだ？」

「雄河さんの髪って染めてるんですか？」

「いきなりソコか」

あれ？聞いちゃマズかったかな？

「あ、嫌ならいいんです！」

「いや、別に嫌って訳じゃ無いんだけどな
俺の髪は何でか知らねエけど
生まれ付きずっとこうなんだ」

「親御さんの遺伝とかではないんですか？」

「ウチの家族は全員粉つことなき黒髪だ」

「じゃあ、何で？」
「知らん」

「ええ！？」

反応早いな…
うーんと他には…
何を話せばいいかな？

「あ、あの」

とりあえず話すことが決まったから
話しかけてみた。

「あ？」

「携帯番号教えてもらっていいですか？」

「何で？」

「助けて頂きましたし、せっかく知り合っただんですし」

「あっそ」

そう言いながらも携帯を出してくれたので
私もあわてて自分の携帯を取り出す

〈
〈
〈

番号とアドレスを交換した後
一番気になっていたことを聞いてみた？

「あの、その制服って桜ヶ丘高校ですよね？」

「あ？そうだけど？」

「あのどんな高校ですか桜ヶ丘って！？」

私の第一希望の学校だったから
つつい、声をあげてしまった

「ちょい、ボリュームを下げる……」

「あ、すみません…」

雄河さんに注意されてしまった…

「桜ヶ丘ねエ…まア、女子が滅茶苦茶多い」

「そういえば去年まで女子高でしたしね
あれっ？って事は雄河さんって高1って事ですか？」

「そうだけど？」

「ええ！？」

「おおっ…なんだよ？」

「いや…明らかに見た目が高3くらいだったもので…」

「そっいゃ、オマエは？中1？」

「違いますよ！！！」

また大声をあげてしまった…

「私は中3です！！」

「…声がでけエ…って中3！？お前が！？」

「そこまで驚かなくても…」

「オマエ明らか見た目小学生から中学1年生だぞ？」

「そんなに！？」

若干、ショックだった…

小さいことは前から分かっていたけれど
そこまで言われると若干…というか

かなりショックだった

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

雄河 side

ツインテ娘、こと中野梓に連れられてファミレスに入り
少し話した後夕食を摂った。

「んじゃあ、とりあえず飯も食ったし帰るとすつか？」

俺からそういうと

中野は「そうですね」と言い席を立とうとすると
「あれっ？」と呟いた。

「どうした？」

「会計のレシートが…って、あ！？」

「あ？」

俺がレシートを持つてることに
気付いたのだろう

「私に払わせて下さいよ！！」

「いや、ダメだ」

「何ですか!？」

とういしながら手をパタパタと
振り始めた。

「男が年下の女の子に払わせる訳にはいかん」

「でも…」

「良いから」

そう言い結局俺が会計を済ませた。

帰り道中野が唐突に話しかけてきた

「あの、今日はほんとにありがとうございました！」

「どうした？いきなり？」

「いえ、ほんとに今日はご迷惑をかけてばかりで」

「気にすんなって俺は道を
通りたかったただけだって言ってる？」

「とにかく、ありがとうございました……」

「ま、気持ちは受け取っておく」

「そういえば雄河さんの家ってどこなんですか？」

と中野が聞いてきた。

「もつすぐそこ」

「え！？」

「どうした？」

何か知らんが突然中野が声をあげた

「私の家もすぐそこなんですけど…」

「どこ？」

「あの、角の家です」

「……………」

「…どうしたんですか？」

ちよつと待て

十一話（後書き）

今回は少し雄河の過去と

梓との出会いを書いてみました。

次回もできるだけ早く更新します！！

それでは！！それではッ！！

十二話（前書き）

とりあえずアニメの2話、楽器！の前半をお送りします。

それではどうぞ！

十二話

「それでは、これでホームルームを終わります」

…担任の長ッたるいホームルームが終わり

昨日の中野との一件のせいでまともに眠れなかったため
現在睡魔と戦闘中なのだが

ようやくその戦いに終止符が打たれた。

「帰るか…」

部活があつたはずだが

面倒だったので帰ろうとした…

…が

「ユウくん」

「あ？」

帰るために立ち上がろうと思った時
不意に誰かから声をかけられた。
まあ、唯なんだがな…

「部活に行こう！」

満面の笑みで俺に向かって
話しかけてくる唯、
ただ、ひたすらにダルそうにしている俺。
距離は一メートルも無いのに
温度差が北極と砂漠くらいあった。

「面倒だからパス…」

「よし、行くうー!」

「……」

昨日の中野といいコイツといい
何で俺の発言はことごとくスルーされんだよ…
そんなこんなで若干イライラしつつ
唯に促され部室前へとやってきてしまった。

「はア…眠イ…ダリイ…しんどい…」

「あ、ユウくん。ため息していると幸せが逃げちゃうよ。」

「とつくに幸せなんざ逃げてるっつの……」

コイツに捕まってここに連れてこられた時点で
完全についてねエ……
はア……家帰って寝てエ……

「こんにちわ」

「……」

またも俺のセリフ、ガンスルーで唯が
部室のドアを開け放った。

「よっ！」

そう言つて最初に声をかけてきたのは
軽音部の頼れる？部長、ドラムの『田井中律』だつた
愛称は『りっちゃん』だそうだ

「こんにちは」

次に声をかけてきたのは
相変わらずお高そうなティーセットを運んでいる
キーボード『琴吹紬』、女性陣からの愛称は『ムギ』らしい

「こんにちは」

ラストはお姫様カット？って言うのだろうか？
長い黒髪が特徴的な、ベース『秋山澪』
愛称は…よく分からん…

「おっ、ユウもおーっす」

続いて入ってきた俺にも声をかけてくる律

「川霧くん、こんにちは」

ムギも声をかけてきた…しかし

なぜか、漑だけはなんかモジモジしていた。

「……？」

俺が不思議そうな顔をしていると唯が漑に話しかけて行った

「どうしたの漑ちゃん？」

「い、いやっ何でもない……」

「？」

続いて唯も不思議そうな顔をした

(どうしたんだ？ 零の奴…？ まあ正直言つとどうでもいいけどな)

「ところで、何で零ちゃんはギターじゃなくてベースをやろうと思ったの？」

…話の流れをぶった切って唯が話始めた。
いや、別に問い詰めるつもりはないんだけどよ…

「えっ？…うーん…だってギターは…は、恥ずかしい…」

「は、恥ずかしい？」

（何で？恥ずかしい？）

理解できなかった。

結構長い間やっているとはいえ

別に俺も始めた当時恥ずかしいなんて思ったこと無かった。

「ギターってバンドの中心って感じで先頭に立って演奏しなきゃいけないし

観客の目も自然と集まるだろう？…自分がその立場になるって考えただけで…」

ポウンッ！！

「み、澪ちゃん！？」

「…どした？」

「大丈夫？」

漣の頭から蒸気みたいなのがでた…

しかもかなり勢い良く…

倒れそうになった漣をムギがすかさずフォローする。

「ムギちゃんはキーボード上手いよねキーボード歴長いの？」

一段落ついてから今度はムギに
同じような質問をした。

「私、四歳のころからピアノを習っていたの
コンクールで賞を貰ったこともあるのよ？」

と、ムギ…

…コンクールで賞を貰った？

どんだけ上手いんだよ…

っーか、なら何故軽音部に入ったんだ？

「へ！？へえ、すごいねえ！」

唯が感心したような声をあげた。
まあ、俺も同感だ。

「さあ、頂きましょう」

例によつて

机の上にケーキやらクッキーやらが
並べられた。

…つーか、ここ軽音部のはずなんだけどなあ…
見た目明らかにどこぞの喫茶店だぞ…

「そういえば、ずっと疑問に思ってたんだけど
この部屋ってやけに物が揃ってるよね？
最近の高校ってこんな感じなのかな？」

と唯が疑問に思つたんであろうことを呟いた。

でも、そーいやそーだな…
ティーカップとかな…

「ああ、それは私の家から持ってきたのよ」

「自前!？」

「マジかよ!？」

「はいっ」

何だ?コイツの親はどこぞの大企業の社長か?しかも、かなり高そうなティーカップだしよ…すると、硬直から溶けた唯が律に話しかけた。

「りっちゃんはドラムって感じたよね」

ああ…何か分かる気がする…
話し方とか仕草とか見ても男みてェだしな。

だが、本人曰く…

「んなっ！？…私にもちゃんとすごく立派な聞けば誰でも感動する理由があるんだぞ！？」

だそうだ、まあ俺には
そうは見えないんだがな…

「へえ〜！どんなどんなっ？」

唯が律に向かつて
知りたそうな顔で問う。

「それはっ！」

「ん？」

「えーっと、あれだ…カッコいいから…」

やっぱりな…
明らかに虚勢を張ってるようにしか
見えなかったからな。

「そこ？」

唯も若干がっかりした感じで呟く。

「だ、だつてさ」

と、律が言い分を述べ始めた。

「ギターとかベースとかキーボードとか！
指でちまちまちましますのを想像しただけで
~~~~~ッ！！！！！ってなるんだよ！！……はあっはあ……」

「どんだけだよ……  
別にそこまでちまちはしてねエぞ……？」

「ユウくんはどうしてギターやろつと思ったの？」

三人に聞き終わったので最後に俺に唯が問うてきた。

「まあ、ギターを貰ったのがきつかけといえはきつかけかな？」

「へえ、誰からもらったの？」

「あんま詳しくは覚えてねエけど…確か親父の友達のミュージシャンだったと思う」

俺も正直小さかったから詳しくは覚えてはいなかった。  
まあ、貰ったのが十年前だからな…

「『ええ！？』」

「って、何だよいきなりデカイ声出して？」

他の四人が同時に大声をあげた…  
何だ？俺、変なこと言ったか？

「ユウのお父さんってミュージシャンに友達いんの！？」

いち早く硬直から解けた律が驚きながら聞いてきた。

ああそういう事ね…  
ミュージシャンの友達がいるって  
普通じゃねエもんな…

「まあ、昔の同級生らしいけど」

「その人からもらったギターって？」

続いて澪が硬直から解けたらしく  
勢いよく聞いてきた。

「ああ、ボール・リード・スミスPRSって知ってたか？」

「えっと確かにチャード・ウィリアムスが使ってたギターだよな？」

流石、この中で結構真面目そうな奴だけある

「まあ、そのあたりが有名かな？」

「そのギターっていくら位するの？」

どうなんだろう？

貰ってからそんなこと考えたこともなかったな……  
そっぴや俺、今日ギター持ってきてたじゃん

「分っかんねエけど……じゃあ、見てみるか？」

「持ってきてんの！？」

とか、言いながら律が話に入ってきた。



「ああ、ちょっと待っててくれ」

そう言つて、部屋の隅に置いておいたギターを取りに行った  
次いでケースから出したそれを漣に手渡す。

「結構重いね？」

「まあ、女にとってはそうかもな」

「うーん私じゃどうか分かんないな」

流石の漣でも分かんなかったか

まあ、別に金額なんて分かんなくても特に問題ねえしな

「そうだ！ユウくん！」

「何？」

「弾いてみて！！」

「何でお前そんなにテンション上がったんだ？」

「そうだよ、弾いてみて！」

と 零

「持って来たんだから弾いちまえよ」

と 律

「私も聞いてみたいです!!」

と ムギ

…別に断わってはいねえんだけどな

「別に良いけどよ…」

全員に促され  
ギターを弾くことになった。

まあ、別に嫌じゃねえんだけど  
何というか滅茶苦茶見られてるんだけど…  
何しろ、ほんとに一メートルも無いくらいの距離感である。

「なあ」

「「「なに？」」「」」

「近エんだけど…」

と、四人を抑え

ギターを弾き始める。

）  
）  
）

何か懐かしい感じがした…

昔の頃の事がフラッシュバックの様に  
頭に流れん込んで来た

でも、あんまり思い出したくない

事まで思い出してしまった……

）  
）  
）

でも、もうあんな事にはさせないと誓った

）  
）  
）

そうこうしてる内に  
ギターを弾き終えた。

「「「「  
……」」」」

と四人がまったく反応せずにボーッとしていた  
……っか、大丈夫かコイツ等？

魂でも抜け出たんじゃないか？

そんな馬鹿なことを考えていると

一番最初に正気に戻った律が声をあげた。

「う、う、う、」

「あ？」

「うめえ！！！！」

「おおっ……何だよいきなり」

すると律の声で三人も正気に戻る。

「すごい！川霧君！上手」

「凄い…」

「何かよく分かんないけどすごく格好良かったよ！！」

と、各自から感想が述べられる…  
「つか、唯…よく分かんないって…」



まあ、正直嬉しかった。

「まあ、ありがとよ」

素直に思ったことを述べてみた。

その後の会話はあんまり関係無さそうだったの  
で俺は机に突っ伏して睡眠をとった……

## 十二話（後書き）

読んで頂きありがとうございます！

次回もできるだけ早く更新します！！

後、感想なんかも待ってます！！

## 十二話（前書き）

前回の続きです！

ちっそくぶじげん！



携帯の着信音で目が覚めた…  
本日は週末の土曜日、故に早く起きる必要はねえはずだ…  
だがまあ、電話に出ない訳にはいかない訳で…

「……あ？」

とりあえず仕方なく受話器に耳を当てる。

「おつ、やつと出た。  
おいユウ、何で来ないんだよ」

電話の相手は我が軽音部の部長、田井中律であった…

「何だよ朝っぱらから？そして来るってどこに？」

「商店街に決まっただろ」

「何故？」

律の言葉の意味がさっぱり分からなかった。

「商店街に來い」？…何故？

「何故ってこの前の部活で言っただろ」

「全くこれっぽっちも聞いてねえんだけど？」

「いや、私言っただけど…」

「  
…いつ？」

律の声のせいで頭がガンガンしている中  
言われたかどうかという事を脳内で検討していた。

「この前、ユウがギター弾いてくれたじゃんか？」

「弾いたな」

「その時！」

「  
……………」

俺確かあん時寝てたな…？

「了解しました部長。で、今から俺はどこに行きや良いんだ？」

「お、来る気になったな？じゃあ、今から商店街の入り口に来て」

「了解…」

ピッ

携帯を切り

ベットから起き上がりながら

気ダルイ体を引きずってリビングへ…

「あら雄河、今日は早いのね？」



とお袋からの一言…

「とある自己中心的な部長のせいだな…」

お袋の声に返答しつつ時計を見ると  
十時半を回っていた。

「お袋、俺今から出かけてくつから朝飯いらねエ？」

「あら、珍しいわね？…はあ〜ん」

「あ？」「

お袋が意味深な顔をしてニヤけていた。

「さては、デートかしらね？」

「んな訳あるかつつの……」

返答しつつ身支度を整えていく。

「あら残念」

「ウチの部長からの呼び出しだ」

「軽音部のお友達？」

「そつだよ……ンじゃあ、行ってくる……」

そう言い残し、玄関のドアを開け時間を確認  
現時刻十一時三十五分…

「はあ…、仕方ねえ走るか…」

観念し、全力疾走するため軽くジャンプする。

「よし」

眩きながら、重い体を動かしながら俺は商店街へ向け走り出した。

ンで、今に至る訳だ。

「はあっはあっはあっ…」

息を荒くしながら走っていると  
唯たちらしき人影が見えた。  
なので、スピードを軽く落としながら  
その人影へと近づいていった。

「よお…」

「「「うわぁ!!!」」」

あの後、唯達が大声を上げたため周りから変な目で見られながら移動するという苦行を執行しながらどうにか今に至っている。

「お前ら…呼び出しといて驚いてんじゃねエよ、俺が痛い目で見られたじゃねエか」

「い、ごめんって」

律が少し申し訳なさそうに言ってきた。

まあ、反省しているようだし責めるのはやめてやろう。

「で、今日は何の為に予備出した？下らねエ理由なら帰るからな」

「大丈夫！！ちゃんとした理由だから！！」

「今日は唯のギターを見に行こうと思ってたんだ」

と、零の補足説明が入る  
なるほど…ふむ…唯のギターをね。

「了解その理由なら大丈夫だ」

特に問題なかったので承諾する。  
ここでムギが唯に話しかけた。

「そう言えば唯ちゃん、お金は大丈夫だった？」

ああ、そうだな。  
どんなギターでも金が無きゃ話にならないしな。

「お母さんに無理言って五万円前借させて貰った。」

「まあ、五万くらいあれば良いのが買えんだろ」

「うん！…これからは計画的に使わなきゃ…いけないんだけど」

「今なら買える…」

いきなり、本来の目的を見失いつつあるな…

「コラコラ」

律がショーウィンドウに張り付く唯の首根っこを掴んで制止をかけたのだが、

「ちょっと、見るだけ」

と、女物の服が売っている店へと入って行った。

「おいおいおい…」

俺が呆れた声を上げると

「ああ…」

と澪も同じく呆れた声をあげた

「どうすんだ、おい…」

初っ端から寄り道かよ

「ごめん、雄河…ちょっと待ってて」

「了解、俺はそこの喫茶店でも入って休んでるよ」



唯の事は濡に任せ俺は喫茶店に向かうことにした。  
まあ、走ってきててノドが乾いてたしな

「じゃあ、また後で電話するよ」

「りょーかい」

カランカランッ

「いらっしゃいませ〜…って雄河!？」

「何でアンタがここにいんだよ…？」

俺は近くの喫茶店に入った…のだが、俺を出迎えてくれた店員は俺の良く見知った人物だった。

「アタシはバイトしてるんだけど…」

「……………スマン、姉貴…帰るわ…」

「ちよっちよっと!!」

その人物 姉貴は慌てながら俺を引き止めた

「何で俺は外に出てまで肉親に会わなきゃいけないんだよ？」

世間狭すぎんだろ…

「とりあえず、席に案内するから入って」

「はあ…」

とりあえず姉貴にテーブルへと連れて行かれ無理やり座らされた。

「で、あんたは何でここに来たの？」

「俺が喫茶店に入ったら何かおかしいのか？」

「いや、そーゆー訳じゃないんだけど…」

「ただ、ちょっと時間が空いたから寄っただけだ」

「なにになに？デートでもすんの？」

「……はぁ……… 何で家の人間は同じような質問をすんだよ」

「？」

「気にすんな、こつちの話だ……」

訳が分からないみたいな顔をした姉貴にいちいち説明するのも面倒だったので適当に流す……

「ンじゃ、アンタの奢りでサンドイッチでも……」

冗談交じりに姉貴に注文を入れる  
すると

「はぁ、今回だけだからね」

姉貴はそう言い残し厨房の中へと消えていった

案外あっさりオッケー出たな…

… 澪からの電話はまだ入らない

なら、今、寝てても大丈夫だろう…

でもまあ、メールくらい入れとくか…

『隣にある喫茶店にいるからな』

と、ちゃっちやと本文を入力し、澪へと送っておく。

さて、俺は一眠りでもするか…

そう思い、俺は意識を夢の中へと飛ばした。

### 十三話（後書き）

次回もできるだけ早く更新します!!

感想なんかも面白かったら気軽に書いていただいて結構です!!  
ダメだしなんかでも構いませんので（笑）

それではそれではッ!!

## 十四話（前書き）

ようやく唯とギー太の出会いです！！

それでは、どうぞッ！！

## 十四話

「……河」

「……………」

誰かが俺の名前を呼んでいる（多分）  
だが、眠い状態でいちいち反応するのも面倒なのでスルー…

「……ウー！」

今度は一際はでかい声で…

「ユーウー……起きろー……！」



つか、この声とこの呼び方って…

「ユー…」

「うるせエな…」

「うわっ！」

案の定、律であつた…  
だが、周りには他のメンバーもいた。

「あつ、ユウくん、おはよー」

「川霧くん、大丈夫？ 凄く眠そうだけど？」

唯&ムギが声をかけてきた

「大丈夫だ…っか今何時だ？」

ふと疑問に思った事を解決すべく  
店内にある時計に目をやる…

「お前等、どんだけふらついてたんだ？」

俺がここに入った時刻は十一時五十分…  
現時刻、一時十三分…  
時間にして約一時間半

「いや、唯を連れ戻そうとしたさあ、  
ちよつと面白そうだったから一緒に見て来ちゃった」

「はあああああ……」

いつにも無い大きなため息が出た。

「じゃ、私たちも少し休むか？」

「そうだね」

律の提案に唯が乗る。

「後、ちょっとだけだからユウも良いだろ？」

「…部長さんの好きにしてくれ」

「はあゝ疲れたゝ」

そう、唯が呟いた

結局、休憩することになったらしく  
俺の座っていた席にテーブルを二つくっつけて  
他の四人が座るといふ形になった。

「へへゝ、買っちゃったゝ」

次に律が口を開いた。

…っか、お前止めに行ったんじゃねエのかよ…

ふとそんな事を思ったが面倒だったので言うのは止めておいた。

「楽しかったですね」

ムギよ、楽しんじゃイカンだろ…

「次どこ行こっか？」

唯の発言で一瞬、俺の思考回路が停止した。

…… オマエ等一体今日何しに来たんだよ  
そんなことを考えていると唯が続けて喋り出した。

「あれっ？…何か忘れてない？」

「楽器…」

「楽器だろ、楽器」

漣と俺の声が重なった。

「おお！しまった！」

…『しまった！』じゃねエよ…

「オマエは一体今日何しに来たんだよ…」

結局、ツツコミを入れてしまった。

「やっと着いたな…」

若干、面倒ではあったが部活をやるのなら避けて通れない道だ…

【10GIA】

それが今現在、俺達がいる楽器店の名前だ。  
昔、俺もよく利用していた楽器店である  
別に、大した理由は無く  
家から一番近いからという理由である。

そんな事を考えていると  
いつの間にかギターのある辺りへ来ていた。

『雄河！雄河！私、このギター欲しい！！』

「ッ！！」

…一瞬、昔の事が頭を過った  
俺としては一番思い出したいくない思い出だ。

「雄河？…どうかした？」

澪が心配そうに俺の顔を覗き込んで来た。

「…いや、別に何でもねエ…」

「それなら良いんだけど…」

…しまった、あんまり心配させねエ様にしねエと

「すごい！ギターがいくつぱい」

ギター売場へと本格的に入ったところで唯が感嘆の声を漏らした。  
まあ、最初はそんなもんだろうな…



そう思い、唯が扱えそうなギターを探してみる。

「ん〜」

すると、唯がいつの間にか俺の隣にあったツインネックのギターを凝視しながら唸っていた。

まあどうでも良かったので、とりあえず、他のギターを探してみる。う〜む…女子が使ったしやっぱり軽いのが良いよな…

「ねえ、雄河」

「あ？」

ふと、考えに耽っていると  
漫に声をかけられた？

「どうした？」

「唯が」

「平沢？」

唯なら俺の隣にいたはず…

「…って、いねェし」

隣にいたはずの唯が煙の如く消えていた。

「あっち…」

漣が指差した方を見ると一本のギターの前で唯が屈み込んでいた。

(…あいつはネズミか)

「で、唯がどうした？」

「ちょっと来てくれないか？」

「？」

訳が分からなかったのと、りあえず零に着いて行くと、零が俺を呼んだ理由が分かった。

「あつちに、安いのあるぜ」

律が唯を促そうとしているが

「ほえ？…ん、うんやっぱこれが良いな…」

そう言いながら唯が見ているのは  
赤いボディのとあるギター…

「ギブソン・レスポールかあ…」

見る目があることはあるんだが  
学生にそれはちょっとつらいかもな…

「そう言えば、私も今のベースが欲しくて悩んで悩んで…」

「私も、中古のドラムセット値切って値切って…」

「店員さん泣いてたぞ」

「どうしてもあのドラムが欲しかったんだよ」

店員さん泣かせるって…

どんだけ値切ったんだよ

大阪のオバちゃんかオマエは…

「あの、値切るって？」

「ん？…欲しいものを手に入れるために努力と根性で負けさせる事だよ！」

「まあ、ほとんどの人はやらねエけどな」

「凄いですね！何か憧れますー！！」

最近、ムギの思考回路がどうなっているのか非常に気になることがある。

すると、唯を見つめていた律が突然

「あ、よし！みんなでバイトしょ！」

との一言…

「は？」

律の発言に思わずアホみたいな声を上げてしまった。

「バイト？」

「うん！唯の楽器を買うために！！」

ムギの質問に律がすぐに反応した。

「ええ！？そ、そんな悪いよ」

バツが悪そうに唯が言う…が

「これも軽音部の活動の一環だって…！」

「りっちゃん…」

「私やってみたいです！」

続いてムギも参加したいとの一言…

「ムギちゃん…」

「うつしやあ…やるぞー！おおー！！」

…律よ、やるのは別に嫌じゃねえんだけど  
俺と零の意見も少しは聞けよ。

「おおー」

乗るムギ…

「おおー！！！！」

二人の勢いに乗せられる唯



「どんなバイトするんだろ…」

若干不安そうにする漑

そして…

「もう好きにしてくれ…」

どうでも良くなつた俺…  
シールすぎんだろ…

つか…バイトかよ…

## 十四話（後書き）

遅くなり申し訳ありません！

次回はもう少し早く更新するようにします！

## 十五話（前書き）

前回の更新から一カ月近く経ってしまい本当に申し訳ありませんでした！！！！

正直に申しますと完全にプライベートのせいです！ハイ！！

部活の合宿やら、家族旅行やらで忙殺され

やっと今回更新する事が出来ました！！

## 十五話

.....

気が付いたら

なんだか薄暗い場所に立っていた

何処だこんななんて疑問も持ったが

俺は今、目の前の光景が信じられなかった…

「さアてとツ、格下の分際でこの『大罪人』に喧嘩を売るその根性、  
も才一度見せて貰おうかア」

「か、勘弁してくれッ!!」

「オイオイ、自分から喧嘩売ってきたくせに何言ってるんだア？」

「ひっ！！」

「アハハハッ！アハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

「ッ！！！！！！」

「……………」

目を開くとそこには見慣れた天井があった…

「夢…」

夢を見ていたらしい…  
とてつもなく嫌な夢…

「……『大罪人』…か…」

それは俺にとっては忌々しい名前…

「クソったれが…」

朝っぱらから最低最悪の夢を見た為  
不機嫌さMAXでリビングへと降りて行き  
リビングのドアを開ける。

ガチャッ

「おはよ…って、どしたの朝から凄い顔して!？」

ドアを開けると早々に姉貴に声をかけられた

「うるせエな…ただ寝不足なだけだったの…」

まあ、まんざら嘘でも無い…

昨日の夜は幸治とのメールのやり取りで  
寝たのが3時半だしな…

「ふん…それにしても凄い顔だよ?とりあえず顔洗ってきたら?」

「あゝそうだな…」

「あら、おはよう…って随分と不機嫌そうね？」

「べつつに…とりあえず、顔洗ってくる…」

「あつ、雄河…」

何か呼ばれた気がしたが顔を洗うのを優先することにした  
なのでとりあえず、洗面所のドアを開けようとドアノブに手を伸ば  
したのだが

先に内側からドアが開け放たれた…

ガンッ

いきなりだったので避けることも出来ずに真正面から衝突した



「イッテエ……」

「うおっ」

中から出て来た人物も突然の衝突に驚いた声をあげた。

……って待てよ……家には俺、姉貴、お袋の三人しかいねエは……  
そう思い、顔を上げるとそこにはここ3年位見てなかった顔があった。

「……親父か？」

「お前、雄河か？随分と大きくなったなあ！」

「ンな事はどうでもいい、アンタこそここ3年位何してやがった？」

「悪いなあ、仕事の関係でイタリアまでな！で、これがお土産」

そう言うとき親父は着ていたスーツの内ポケットから一本の万年筆を取り出した…

「いらん…」

「そんなこと言わずに貰っとけて〜」

「メンド臭エ…」

「っともつこんな時間か…じゃあ、俺は少し会社で顔を出してくる」

すると、俺にお土産の万年筆を押しつけて  
そそくさと玄関の方へと走って行った…

「何だアイツ…」

「何か一時帰国らしいわよ。明日にはまたイタリアに戻るらしいわ」

「あつそ…」

「あんたの父親でしょ」

「アンタの夫でもあんだろ」

親父との再会后

感傷に浸る事も無く楽器屋へと足を運んだ。

まあ、理由は皆さんお分かりだと思うが唯のギターの下見である…  
理由はギブソン・レスポールなんてめったに女が使うギターじゃね  
エシ  
重いし、クセがあるし、ネックは太いしで唯が本当に使えるか不安  
になったって訳だ  
なので、まあ試し弾きをするつもりで【10GIA】の入り口を潜  
った…のだが…

「お、雄河先輩じゃないっすか!？」

「…古賀」

「わあゝ久しぶりっスねゝ」

古賀健也

中学校の頃俺に良くくっついてきた後輩である。

「…なんで、ここにインだ？」

「いやゝ実はゝ」

「おい古賀、お前何して…って、おいおい懐かしい顔じゃねえか」

「ッ！！！！！？」

店の奥の方から顔を出したのは  
俺が最も忌み嫌う男…芦屋晋也だった  
まあ、その事はまた別の話だ。

「待て待て待て、そう身構えんなくて。今日は純粹に客としてここに来たんだ

別にお前を待ち伏せしてたなんて訳じゃねえよ」

「よくもまあ、俺の前に平然と現れたな？」

実を言うと昔の事件についてはコイツが深く関わっている…

「だから、そう身構えんなって」

「ウルセエ、お前なんか信じられるか」

「雄河先輩落ち着いて下さいよ」

「全く、お前は…そうだ雄河、一つ提案があるんだが」

「あ？」

「お前、もう一回俺達と組む気はねえか？」

「お、芦屋先輩ナイスアイデア!!」

『大罪人』と『君臨者』また二人が組んだ所が見れるんですね!  
!」

「断る」

「えっ!?!」

「……」

「断ると言っただ」

「そんな、でも……」

「オーケー分かった」

「芦屋先輩!?!」

「仕方ねえだろ、雄河嫌だっって言っただからよ。なあ、雄河よお」

そう言いながら芦屋は俺の耳元に口を寄せこつ呟いた

「R e g r e t   t h e   t h i n g   c u t   o f f …」

「悪いな、英語は得意じゃねェんだ」

「そうかい。行くぞ、古賀」

「あ、はい！」

そう言い残すと芦屋と古賀は姿を消した…



帰り道

俺は色々な事を思い出していた

芦屋の事、中学の頃の軽音部の事、そして『あの事』

今日は、何も起きなかった…だが芦屋の性格上このまま終わる事は決して無い…

でも、もう俺は『闇』には引きずり込まれねエ…そう誓ったんだ

## 十五話（後書き）

『オリキャラ紹介』

黒「第一回目のオリジナルキャラクターは皆さんご存じの通り川霧雄河君です!!」

雄「何唐突に始めてんだテメエは…」

黒「早速ですが雄河君のプロフィールをまとめてみました」

雄「何、勝手に調べてんだ…」

本名：川霧雄河

かわぎりゆうが

身長：168cm

年齢：15

国籍：日本

職業：高校生

容姿：白い短髪と赤い瞳に中性的な体格の少年

備考：昔、中学校の頃に起きた事件によりあまり感情を表に出さなくなった

黒「と言つのが雄河君のプロフィールです」

雄「もう勝手にしろ…俺はもう帰る…」

黒「ちょ、ちょっと…！…えーっと本人が帰ってしまったため  
今回のオリキャラ紹介は以上です…それでは  
ちよつと、雄河つてば」

黒「っと！それと…！…！感想を…！感想を下さ…い…！…よろしく  
お願いします…！…！」

## 十六話

「それじゃあ、また明日ね」

「お」

この前の芦屋との接触から三日が経ち二日間のバイトを終えた俺達は今日楽器屋に行き唯のギターを購入した。しかし、実の事を言うバイト代だけではレスポールの値段に到達できなかったのだが、琴吹が徐に店員とコンタクトを取ることに五分、25万もしたレスポールの値段が5万にまで引き下げられた時には琴吹以外の全員は開いた口が塞がらないと言った風であった。

なんでも、琴吹曰く父親の会社の系列店らしく顔が利いたとの事らしい…恐るべき琴吹家…

そんなことを考えていると…

「ゆーっがー！ー！！」

「あん？」

声のする方へ顔を向けると…  
長い黒髪のポニーテール少女が走ってきて俺の腰辺りにダイブしてきた。

「うおッ!!」

いきなり突っ込まれた為バランスを崩し  
そのまま、後ろ向きに倒れる形となった…  
後ろ向き故に受け身を取るのとは不可能…  
待ち構えるは転倒&…

ガンッ!!

「イツテエ！！」

後頭部強打…

「やっと会えたさーっ！！」

少女は顔を俺の胸元あたりに埋めているので顔が見えない…

「って、オマエ誰だ！？そして、知り合いだとしてもいきなり突っ込んで来んじゃねエ！！」

「ほえ？」

不思議そうに少女が顔をあげ……って！！

「湊！？何でここにいんだ！？？」

「ちょっとした理由でこれから雄河の家でお世話になる事になったさーっ」

はっ！？何故に！？俺ンなこと聞いてねエぞ！！あ……あンのクソ親父イイイイ！！

今度、帰ってきたらまず！顔を殴る！！

ちなみに、分からないと思うから説明しておくが、コイツは『我那覇湊』  
みなと

俺が小学校の頃親父の転勤で一度沖縄に行ったときに一番仲の良かった友達だ。

「これからよろしくさーっ！」

.....

「という訳で湊ちゃんは家で与る事になりました。分かった？」

「おうー！.....とても言うと思ってんのかアンタは！！」



「母親に向かってアンタとは何よ？」

「雄河、気にしてても仕方ないさーっ！」

「母親も何も、行き成り過ぎんだろー！！何で俺に言わねエのー！！？  
言えよー！！後、お前は黙ってるよー！！」

「じゃあ、今、言っただわ」

「俺が良いてエのはそういう事じゃねエんだよー！！」

まず、何故こんなにも俺が暴走気味にツッコミを入れているのかと言うつと

あの後、湊を連れて家に帰宅して、即座にお袋に何故かと問いかけたところ

「何、アンタ知らなかったの？」みたいな顔で見えて来やがった。

で、今の今まで事情を聞いていたのだがいい加減耐えられなくなりツッコミを入れてしまった。

「まあ、今更何言っても無駄なんだろうけどよ…」

何でも、湊の親が転勤で海外に行くらしく一人暮らしで高校に行かせるのは不安だから仲の良い家に相談してきたらしい…最終的に勝手に親父とお袋が決めてこうなった

で、何か空いてる部屋が綺麗になるまでは湊を俺の部屋で寝かせるらしい。

『でもな、一つだけ言わせて貰うが一緒の部屋で寝るのはダメだ』

この発言のせいでお袋&湊にずっと説得され続ける羽目なり

「分かりました…」

諦めざるを得なくなった

.....

「ねえねえ、こんな風に一緒に寝るのなんて久しぶりだな」

「あ？あゝそうだな…」

おかげで体力の限界である…  
まともに話す体力も残っていない。

「テンション低いさーっ、もっと上げて行こうー!!」

「あのさ…明日いくらでも相手してやるからとりあえず今日は寝ろ  
…」

「うっん、分かった、お休み」

「おう…」

はあ、やっと寝れる…

どんだけタフなんだコイツ、

まあ、俺もコイツのこういうところは嫌いじゃねエけどな

つか、コイツもウチじゃなくて沖縄の友達の家に行けば良かった  
んじゃないエの…

って、そついやコイツ高校どうすんだろつな…

「なあ、湊、お前高校はどうす…」

「くー…くー…くー…」

「寝るの早ッ!？」

コイツどんだけ寝つき良いの!？  
返事してからまだ20秒も経ってねエよ!？

「仕方ねエ明日聞くか…」

そう、呟いた時、ちょうど強烈な睡魔が襲いかかってきた。  
俺はそのまま、睡魔に身を委ね眠りについた。

翌朝、俺は絶望することになる…



## 十六話（後書き）

黒「どうも！更新遅れてすみません！！黒翼です！！今回は雄河では無くこの人に来てもらいましたあゝ」

湊「初めまして、今回から登場させて貰いました。我那覇湊です！」

黒「えーつと、じゃあせつかくだし湊に質問とかしていい？」

湊「うん！どーんと来いさーっ！！」

黒「じゃあまず、あなたの特技は？」

湊「うーん…歌とダンスなら得意さーっ」

黒「じゃあ、趣味は？」



湊「うーん、散歩とかかな、ちなみにスポーツなら卓球が得意さーっ！」

黒「へえ、で、雄河に若干水の字みたいだけど…どうなの？」

湊「うーん、好きか嫌いかで言えば好きだけど何て言うか友達以上、恋人未満みたいなかんじだね」

黒「じゃあ、そのうち雄河と…」

雄「真面目にコメントしろこのバカ…」

黒&湊「雄河!?!」

雄「えーっと、バカみたいな会話を聞いて頂きありがとうございます」

す。次の更新はできるだけ迅速にやらせますのでご了承ください…  
それでは以上『けいおん！』夢翔る物語』より主人公の川霧雄河  
と」

黒&湊「え！？終わらしちゃうの！？」

雄「あん」

ギロツ

黒「うつ…作者の黒翼と」

湊「ちえ…ヒロイン？になるのかな？の我那覇湊でした」

雄「それでは」

十七話（前書き）

やっと出来た…

## 十七話

「待て待て待て！！何、行きなり登場してんだよ！？ゴキブリかオマエは！？」

「別に気にする事無いさーっ！昔はお風呂にも一緒に入ってた仲間だから」

「サラッと俺の黒歴史を暴露してんじゃねエエエエ！！」

さてさて、何故冒頭からこんな会話をしているのかと言うと今朝まで遡らなくてはいけない…

湊が家に来た翌朝、高校はどうするかと聞こうと思ったのだが、いかんせん遅刻ギリギリだった為帰ってから聞く事に決め家を飛び出した俺なのだが…そのプランは湊の手によって打ち碎かれた…学校に着くと生徒達の話題は決まって一緒だった…

『転校生が来る』らしかった…俺自身大して興味が無かったのですがそのままスルー…したのだが、良く良く考えてみると分かる筈だった

「はい、じゃあ入って」

担任の声に反応した様に教室のドアが開け放たれた…教室のからは「可愛い〜」などの声が漏れる…

「はい、じゃあ自己紹介して」

担任に促されたソイツは元気に返事をして自己紹介を始めた…

「はいさい！自分！我那覇湊だぞ！！沖縄出身の十五歳…って歳は皆と一緒にか！…」

「な、な、な」

『呆然とする』とはこの事を言うのだろうか

「何やってんだデメエ！！？」

つついっ叫んでしまった…俺に怒鳴られた湊は笑いながらこちらを向いてこう言った…

「あ、雄河〜これからよろしくさーっ！！」

で、冒頭に繋がる訳だ…

「サラッと俺の黒歴史を暴露してんじゃねエエエエ！！」

何て事言いやがる！？

「何々？川霧君と我那覇さんってそう言う関係？」

同じクラスの女子生徒が冷やかに掛って来る。

「そつだぞー！雄河は昔っから自分にベタベタだったからなー」

ふざけた調子で返す湊…

この状況で俺が取るべき行動は一つ…

「うオオオオ…マジで止めて下さい湊さん…」

湊の言葉によってクラスのほぼ全員が俺達をそんな感じの目で見て来やがる為俺が折れる以外に解決策が見つからなかった…こんなの、竹やりでステルス爆撃機に挑むようなモンである…

「ええーつと、我那覇さんの席はとりあえず平沢さんの後ろで良いかしら…?」

一部始終を見て気まずそうにしていた担任が間を読んで湊に話しかける…

「はーっい!!」

当たり前ながら元気良く返事をする湊…  
某上条さんのセリフを借りるところだ…

「不幸だ…」

朝のホームルームも終わり湊の『転校』と言う爆弾発現&行動により朝っぱらから不機嫌度MAX状態に陥った俺は叫び過ぎたせいか頭痛を引き起こし唯に止められながらも保健室へと向ったのだが、ラッキーなことに保健室の担当職員（名前は忘れた）が俺が入室するとほぼ同時に職員会議へと出かけて行った。

そのため俺一人が保健室に取り残される形となり、状況としては非常に嬉しいのだが朝の件でモヤモヤ&イライラしていたのでそんな考えは頭から飛んでいた…

つか、アイツ何で寄りにも寄ってウチの高校なんだっつの…

「はあああああゝ…」

近年稀にみる大きなため息をつき頭痛のする頭を押さえベットへ向う。

「とにかく寝ねエと体力がもたねエ…」

深く考えていても頭痛が増大しそうなので止めることにしベットへとみを投げ出した…



「はあ…」

「ため息なんかついてたら幸せが逃げるわよ？」

「あ？」

「たつた今、意識を夢の世界へと飛ばそうとしていたが思わぬ侵入者により阻害される…」

「…誰だ？アンタ？」

「声をかけて来た人物…現在保健室の扉の前に立っている女性教師？らしき人物は怪訝な顔を浮かべた…」

「あなたねえ…保健室の先生に頼まれたから代わりに来てあげたんじゃない」

「…あつそ、ソイツはどオモ」

面倒なやつが来たなアおい…

「もう、そんな態度ばかりしてると教室に返しちゃうわよ？」

「そんな権限はアンタにねエだろ…」

「うつ…」

凶星なようだ…

「つーか、俺、アンタに会ったことねエと思うんだけど？誰？」

「えっ？ああ、私は基本的に音楽教諭だからね。あれ？でも確かあったる筈よ？」

「知らん忘れた」

「何回かあなただっけ受けたでしょ私の授業？」

「大概寝てたから知らん」

「って…まあ、良いわ…私は山中さわ子」

「ふーん、一週間ぐらいは覚えとくわ…」

「ずっと覚えてなさいよ!？」

「気が向いたらな…とにかく俺は頭が痛エんだ、休ませろ」

「それもそうね、それじゃあ横になって休んでなさい」

「へーい…」

やっと眠れる…そう思い再び夢の世界へ意識を飛ばそうとした時、再び教室のドアが開け放たれた…

バンッ!!

しかも、さっきとは違い勢いよく…

「ユウくん!」

「何で次にオマエが出現すんだよ…」

何を隠そう天然娘こと平沢唯であつた…

## 十七話（後書き）

雄「オマエ、もっと早く更新できねエのかよ？」

黒「申し訳ない！！文化祭の準備やらなんやらで忙しいんだ…」

雄「はあ」

黒「じ、次回は頑張るから！！」

雄「じゃあ、頑張らなかつたら死刑な」

黒「ええ！？」

雄「それでは、次回の更新で」

黒「雄河？冗談ですよね？」

雄「  
…」

黒「なんか言ってくれ!!」

## 十八話

本当についてねエ…

そう思ったのは湊転入騒動の翌日だった。帰りのホームルーム時に担任からの明後日から始まる中間試験の事について話された…何でも、定期テストで赤点を取った者は追試&追試で合格点を取らなければそれまで部活動禁止だそうだ。

「なあ、雄河…」

「ンだよ？」

「テストどうしようか…？」

自称俺の親友が帰りのホームルーム終了と同時に話しかけてくる。

「知らん、要は赤点さえ取らなければ何ら問題はねエんだ。普通にやるだけだ」



「毎回思っただけだよ、お前って何でもく勉強もしない癖にテストの点数良いんだよ？」

「ただ単に物覚えが良いだけだ」

幸治の質問を軽く流してやる。だが実際そんな大した理由など散在せず本当にただ単に物覚えが良いだけなのだ。実を言うと俺は今までにテスト勉強と言えるほどの勉強も塾なんかに行った事も皆無ない訳だが赤点を取った事は一度もない…確か…

「とりあえず俺はいつも通りにやる」

「ええーじゃあ、他の連中とかも連れて行くからそれならいいだろう？よしちよつと待ってる！！今から人を集めてくる！！」

納得もしていないのに幸治が勝手に話を進め始めた  
そして、許可もしていないにも関わらず勝手に人を集めにクラスのと真ん中へと突っ込んで行った。

「…」

だが、当の俺は華麗にスルー  
待つのもダルイので帰宅開始…

クラスを出た直後「雄河ああああ！！カムバアーク！！！」なるアホの声が聞こえてきたが全く無視…

）  
）  
）

「  
…」

最近、発売した俺が好きなミュージシャンの新曲を聴きながら帰っているとかへ帰る為の近道に差し掛かった。前回中野がバカどもに絡まれてたところだ…

さて、こっちから帰れば5分〜10分程度早く着ける…のだが前回の中野との件がある為嫌な予感しかない…

「じゃあねエ、こっちから帰るか…」

意を決して路地裏の道を選ぶことにした…

今にしてみれば何てバカな事をしたんだろうと思う…

「狭エな…」

両脇にビルが聳え立っている為、体を横にして通らなければならなかった。

もうすぐ、通りきるという時にそれは現れた…

ヒュンッ

何かが風邪を切り裂く音…

ガン!!

そしてその何かが俺の頭部に着弾する音…

「がッ!!」

頭部に激しい激痛が走る…恐らく鈍器か何かで頭部を強打されたのだろう。額に温かく赤い液体が流れる…

「く、クソったれが…!」

「おっ、結構しぶといじゃねエの?」

「ッ!?!」

「芦屋さんの話では強いって話だったけどこれじゃ全然わかんねえな」



## 十九話

『雄河、お前、母さんとお姉ちゃんは好きか？』

親父がまだ、家にいた頃の話だ。

小学校に入学したばかりだった俺は、親父のその質問にこう答えた。

『うん！！だいすき』

屈託の無い笑みを浮かべながら  
すると、親父はこんな事を言った：

『そうか、なら雄河、お前は男だ。男なら好きな人の一人や二人守  
つてみせろ。』

親父も何を意図として言ったのかは今でも分からない。

『うん！』

だが、当時小学生になりたての俺は笑顔で頷いた。

『でも、それは母さんやお姉ちゃんだけに限った話じゃない。お前の好きな人やお前を好きになってくれる人、友達、皆をだ』

『うん…よくわかんないや』

『ハハハッ！それも、そうだな』

当時小学生になりたての俺にこんな事を言う親父は変なのかもな。  
分からなくて当然だ。

『でもな雄河、お前の名前に入ってる《雄》って字には、お前に強くなつて欲しいって意味も含めてあるんだぜ？』

『へ〜』

『だから、雄河、お前は強くなれ、強くなって皆を守ってやれ』

『うん！』

再び子供の頃の俺は元氣良く頷く

『でも雄河、一つだけ約束だ。』

『なあに？』

『強くなる前に人に優しくあれ、それが俺とお前の約束だ！』

若干痩せた顔がニカッと八重歯をむき出しにして笑った。



「……………ん」

気絶していた…のだろう

俺の目が覚めたのは学校からの近道である路地裏であった。  
とりあえず、倒れた体を起こす。

「そういえば…俺…」

（確か路地裏に入った時に頭を…）

恐る恐る頭へ手を伸ばす

「ッ！……！」

頭に手が触れた瞬間、頭部に激痛が走った。  
手に付くベツトリとした生暖かな感触…

「クソツたれが…」

そのまま、起こした体を再び地面へと投げる

「芦屋の野郎…一体何を企んでやる」

ふと、疑問に思った事を口走る…しかし、今、ここにいるのは俺だけ、故に誰からも返答は帰って来ない。ただ、ビルの間を吹き抜ける風の音だけが響き渡り、薄暗い路地を更に不気味に染め上げる。

「仕方無エ、帰るか…」

まだ、痛む頭を押さえフラつきつつも薄暗くなった路地裏に歩みを進める…その時

「雄河？」

聞き覚えのある声が背後から聞こえた為、前進を中断し背後を振り返る。

「やっぱり雄河だ！！もう、こんな時間まで何やって…」

その声の主…湊はそこまで、話してこちらの様子に気付いた様だった。

「雄河！？どうしたんだ！そのケガ！？」

慌てた様子で俺の方へと駆け寄って来る。

フラッ…

その瞬間、今までつなぎ止めていた意識が湊が来た安心感から薄れ、全身から力が抜け倒れる…

「雄河！？雄河！！」

最後に聞こえた湊の声が頭の中に反響し、俺は再び意識を失った…

「ん…」

再び目を覚ますと、俺はベットに寝かされていた。

しかし、ただのベットでは無く、薬品の臭いが染み付いた病院のベットだった

「気が付いた様だね？」

ベットから上体を起こした所で背後の方から中年の男性の声が響いた。

「アンタは…」

その見覚えのある顔に目が付いた。

白くなった髪に多少、丸みを帯びた体…

「久しぶりだね、雄河君」

その男性は俺が最も世話になった医者であった。

「……………」

「君はまた、大変な事に巻き込まれているようだね？もう、止めるんじゃないのかね？」

「分かってんだよ、んな事は」

この中年の男性は桜ヶ丘総合病院の医者、坂本尚哉であった。

彼はこの病院のなかではトップを張る凄腕の医者なのである。

「全く… 中学校の頃から変わらないね、君は。でも、これだけは言っておくがね、これ以上無理をする様なら医者として忠告するよ、彼と芦屋君と付き合うのはもう、止めなさい」

「分かってるっての…」

「良く聞くんだ、君自身は大丈夫かもしれないが、周りは皆、君を心配しているんだ、現に君をここまで運んできた、湊さんだって、泣きながら、『雄河を助けて』と言って来てるんだよ？」

「…湊が？」

心がかつてない程痛んだ…

他人に心配ばかりかけて…何やってんだ俺は…

「悪かったな…」

「それを言うのは僕じゃないだろう?」

「ああ、そうだな」

「とりあえず君はまだ、安静にしておくんだね、また、傷口が開かない様にね」

とりあえず、明日、湊に謝ろう…

そう心に決め、俺は意識を深い眠りの中に沈ませていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5677u/>

---

けいおん! ~ 夢翔る物語 ~

2011年11月17日19時26分発行